

【個人研究】

エル・システマの研究（上）

太田 和敬*

Study of El Sistema (1)

Kazuyuki OTA

Geoffrey Baker criticized El Sistema, the national youth orchestra program in Venezuela. According to Baker, emotion dominates virtually all attempts to analyze El Sistema, so nobody can know the objective facts. He writes that contributors from the region report a lack of facilities, equipment, and teachers and gross inequalities in resources and pay. In addition, El Sistema is a dictatorial organization, and orchestra members must obey conductors. Although the stated aims of El Sistema are to rise up from poverty and to change society through music, the main beneficiaries of the program are middle class children. The slogan is merely a means for receiving subsidies. Classical music and orchestra pieces are too old a style for children to learn, and folk music and small music bands are more suitable and relevant. Baker's criticisms are apt to some degree, but El Sistema has protected 40,000 children from crime and dangerous cities and the program has fostered many top stars in classical music. The brilliant success of El Sistema is based on seven principles: 1. goals so high that they seem impossible to achieve, 2. giving every child access to El Sistema, 3. beginning with practice as an orchestra and not personal lessons, 4. creating different orchestras depending on ability, 5. creating social change through music, 6. assistance from family, 7. building careers. Nevertheless, El Sistema faces difficult political and economic conditions because of the death of Hugo Chávez and a great drop in the price of oil. To survive, El Sistema must become one potential activity for children and not the sole option.

Key words : El Sistema, Venezuela, youth orchestra, poverty, social change

エル・システマ、ベネズエラ、ユース・オーケストラ、貧困、社会変革

はじめに

本論文は、エル・システマに関する論文の（上）となっているが、（下）は既に昨年の号に掲載されている。全体の「はじめに」が既に書かれているので、ここでは、論文全体の課題ではなく、（上）に限定した「はじめに」であることを最初に断っておく。論文全体は、エル・システマを音楽的側

面と社会変革的側面を総合的に見て、その意味を分析するものであるが、（下）で、社会変革的な側面を扱ったので、（上）では、音楽的な側面を主に扱う。

（下）の原稿を執筆後、エル・システマに関する大部の批判書がオックスフォード大学出版から出された。Geoffrey Bakerの“El Sistema orchestrating venezuela's youth” 2014である。これまでエル・システマ礼賛一方だった出版界やその他のメディア情報に対して、徹底的なエル・システマ批判を行った研究書であり、amazon.

* おおた かずゆき 文教大学人間科学部臨床心理学科

comには、2015年1月4日現在、17本のレビューがあり、9が星5つ、8が星1つであり、完全に半々で、しかも絶賛と拒否に分かれている。中間の星の評価は存在しないのであるが、これは、この著作への評価というよりは、エル・システムそのものに対する評価が、絶賛と拒否に分かれるものであることを示しているようにも思われる。ベイカーはこれまでのエル・システム研究が一方的な情報に基づいた礼賛のみで、客観的なデータに基づいた冷静な評価がなされていないとして、この研究をまとめたのだが、逆にベイカーの集めた情報はエル・システムに対する批判的な見解ばかりであり、エル・システムを中心的に担っているメンバーから得た情報はほとんど既存のメディアからの引用である。尤もベイカー自身は、出版後のインタビューで、エル・システムのことは敬意をもって見ており、あまりに礼賛ばかりなので、バランスをとっているのだと述べている¹⁾。

しかし、提起されている問題はいずれも重要なものであり、ここではベイカーの批判の構成を踏襲し、更に別の視点を加えて論文を構成する。

エル・システムの組織論

ベイカーは、エル・システムは出発当初から、音楽のエリート集団を形成することが目的で、そのために手段を選ばず、犠牲を省みることなく、独裁的な体制で組織を発展させてきたという、「民主主義」の観点からの批判をまず展開する。

出発

エル・システムの最初の集まりは1974年の年末に、アブレウと8人の音楽を学ぶ若者が集まって相談を始めたとされている²⁾。そして、翌1975年2月12日に再度の打ち合わせが行われ、2月26日に最初の練習がガレージで行われたが、たった11人しか集まらず、メンバーたちは前途に不安をもった出発であった。しかし、指導者であったアブレウが不屈の闘志で継続を主張し、その後メンバーが増えていったとされる。ベイカーはこの逸話に疑問を呈する。

エル・システム関係者によって、これがベネズエラ最初の青少年オーケストラであったとされる

が³⁾、ベネズエラには当時既に青少年オーケストラは存在しており、むしろアブレウはそうしたメンバーを引き抜いて拡大させたのだという。1970年に実験的な青少年オーケストラができていたし、更に、当時カラカスにJALという音楽学校があったが、アブレウのエル・システムの活動によって閉鎖されたというソホの話を紹介している⁴⁾。エル・システムの最初のオーケストラは、ベネズエラの作曲家であり、指揮者であったアンヘル・サウスÁngel Sauceが設立したランダエタ音楽院 Conservatorio Nacional de Música Juan José Landaeta の付属オーケストラとして構想されたものである。音楽院の創立が1971年であり、この前後にサウスは合唱団や室内オーケストラなども設立していた⁵⁾。音楽院付属のオーケストラだったために、当初の名称は、ファン・ホセ・ランダエタ青少年オーケストラ Orquesta Sinfónica Nacional Juvenil de Venezuela Juan José Landaeta (以下JLJO) であった⁶⁾。

ベイカーの次の指摘は、アブレウが当初11名だったメンバーを拡大したとき、多くは音大卒の音楽家やその卵であって、JALの卒業生などが多数であった。そして、彼らは他の青少年オーケストラのメンバーだった者も少なくなかったが、アブレウはいろいろな財団にかけあって奨学金を獲得し、メンバーの引き抜きをしたのだという⁷⁾。

エル・システムの強固な支持者であるタンストールの記述はニュアンスが異なる。彼女によれば、11名だった団員は翌日25人、翌々日には46人になっていた。そして一月以内に75人になったという。オーケストラとしては十分な人数である。組織の後ろ楯も運営費も名前もなかった。そして毎日練習し、時には12時間にも及んだという⁸⁾。タンストールの叙述にはいくつかの留保が必要だろう。集まったのはやはり音大卒業生がほとんどであり、音楽家になろうと思っていた者だったということであり、当時のベネズエラの状況からみれば、貧しい者たちの集団ではなかったと考えるのが当然だろう⁹⁾。オーケストラの中心となったのはビオラ奏者のディ・ポロであったが、彼はプロのベネズエラ交響楽団のメンバーであったし、またクリーブランド管弦楽団の入団試験に合格し

て、アメリカのトップオーケストラでの活躍が可能な存在でもあった¹⁰⁾。ランダエタ音楽院付属のオーケストラであることから、組織的な後ろ楯があったというべきだろう¹¹⁾。

2カ月後の4月30日には公開演奏会を行い、大きな評判を呼んでいる¹²⁾。この間の練習については、アブレウが指導をしたが、後に発展するエル・システム運動の特質を早くも表していた。

第一に、公開演奏会を重視し、そのための徹底的な練習をすることである。指揮者としてのトレーニングをしたアブレウは、音大で学んだ経験はあるが、プロの音楽家ではなかったために、専門家からは非難の声もあったという。しかし、自身の音楽的解釈を強くもっていたようで、強力なカリスマ性と指導力で若者たちを牽引していったようだ。4月に公開演奏会を開くことを早く決定し、それに向けて練習に駆り立てたともいえる。この後も演奏会、特に外国への演奏旅行を重視し、しかも注目されるように設定していく。そして、演奏会のためのメンバー選抜と練習は限界まで行うようなスタイルが確立していく。このことについては、当初から、青少年オーケストラの目的はより教育的な長いスパンで見るときではないかという批判があったが、アブレウは、自分の方針を貫いたといえる。

第二に、アブレウの政治力が発揮されて、いくつもの困難を解決していったことである。音楽院の付属オーケストラといっても、音楽院自体が設立されたばかりであり、オーケストラの練習が可能な部屋はなかったために、練習場の確保、公開演奏会をするコンサートホールの確保、そして、観客の確保という、全く無名のできたばかりの青少年オーケストラにとっては、いずれも極めて困難な課題ばかりだったろう。アブレウの政治力は、第一回演奏会の結果、メキシコに招待されるが、交通費が捻出できないので、交渉して軍隊の輸送機に便乗させてもらってメキシコへの演奏旅行を実現するのだが、アブレウ以外の人物にはとうてい不可能だったろう¹³⁾。そして、外国旅行をしたという実績は、確実にベネズエラ国内でのアブレウとこのオーケストラの評価を向上させた。

外国演奏旅行の成果は設立の翌年、1976年に、

スコットランドで行われた青少年オーケストラ国際フェスティバルへの参加で更に印象づけられた。アブレウは一年以内に国際大会に出場すると言明していたが、やはり周囲では夢物語とみていたようだ。しかし、14カ国の参加の中で、優等賞 principal chair を獲得し、その後参加者の中から選ばれた選抜オーケストラにも20名が選ばれる快挙をなし遂げた。これによって、帰国後政府からの援助が開始されることになる。

しかし、ベイカーはこの点についても批判の目を向ける。「(アンドレスは) 1976年のスコットランドへの旅行を思い出して、仲間のグループのちょっと後に店に入り、そこで店主が涙を浮かべ、散らかったり、壊されたり、盗まれたりした商品をじっと見つめていたことを述べた。ハリケーンが通りすぎたようだった。イタリアへの旅行は、彼のいうことには、音楽家たちがホテルや店でお互いに盗んでいて、大惨事だった。彼らはホテルを汚し、観光バスの椅子をナイフで切ったりしていた。運転手は、オーケストラのメンバーが殴り合いの喧嘩をしているのを見てショックを受けていた。しかし、アンドレスはそれらに驚きはしなかった。アブレウはリハーサルや演奏にばかり注意が向いていて、モラルや社会的な指導をしていなかったからだ。」¹⁴⁾

ベイカーのエル・システム批判のひとつが、「音楽を通して社会を変革し、音楽を通して経済的貧困を救い、精神的な豊かさを獲得する」という理念は、事実ではないというもののだが、それが当初から現れていたと主張しているわけである。エル・システム支持者の報告はこうした内容は全く書かないので、事実は分からないが、同行者が述べていることは重いものがある。

拡大

スコットランドの音楽祭に出かけるまでは、アブレウの気持ちは、JLJOをプロのオーケストラに育てていくことだったと思われる。1975年にメキシコの優れた作曲家で指揮者だったカルロス・チャベスを招いて指導を扇ぎ、スコットランドでもチャベスが指揮をしている。しかし、大きな成果をあげて帰国したあと、大きく変化していくことになる。音楽祭の前に、テレサ・カレーニョ劇

場が完成して、そこに練習場を確保し、CONAC（ベネズエラ文化協議会 Consejo Nacional de la Cultura）の援助を受けるようになっていた。しかし、音楽祭での成果をもって帰国すると、国民の期待が一気に高まっており、政府の援助をも期待できるようになっていた。

大きな変化とは、まず二つのことに現れた。地方にもオーケストラが拡大していったこと、そして政府が援助する体制ができてきたことである。

ベネズエラでは音楽を志す若者は決して少なくなかったし、青少年オーケストラもエル・システマ以前から存在していたことは前述した通りである。そして、それはランダエタ青少年オーケストラのスコットランドでの活躍に刺激されて、更に地方でも促進されていた。アブレウのとった戦略は、地方に個別に設立され、不安定な運営がなされていたオーケストラやバンドを組み込んでいくこと、そして、ヌクレオと呼ばれる地方における青少年オーケストラの拠点を作っていくことであった。これまでのアブレウの目指していた活動からみれば、大きな方向転換であるように見える。カウフマンはこの事情を次のように書いている。

ヨーロッパから帰国すると、アブレウは、新しい成果の報告を使って、ベネズエラの全国的な音楽学校の建設のための土台を引き出すことにした。あらゆる話し合いをして、どのくらいの費用がかかるか計算し、アルコール、ドラッグ、貧困、暴力などによる問題解決のための費用と比較検討した。事実を知る政治家で、アブレウに反対する人はほとんどいなかった。当時の経済状況からみて、援助の可能性があると思われた。彼の粘り強さ、議論の事実に基づいている点、人脈、敵意のない柔らかな魅力などが、目的の遂行にプラスとなり、夢の実現にむけて踏み出すことに成功した。ベネズエラ政府が、JLJOを、社会、健康の改善を促進することを通して、全国に青少年オーケストラを建設し、貧しいものための音楽学校をつくることを認めさせたのである¹⁵⁾。

ここまでのアブレウの活動は、音楽の世界で活躍することを目指すものであり、ディ・ポロに代表されるように中心的に担っていたのは、ベネズ

エラにおける音楽エリートであった。しかし、貧しい者のための音楽活動へと拡大していく路線をとったのである。この変化が国家からの補助金の獲得と不可分であったことは明白であるが、アブレウ自身が、信念として貧しい者のための音楽を重視するようになったのか、あるいは莫大な費用のかかるオーケストラ運営のための補助金を引き出すための「方便」であったのか。もちろん、最初はそれが単なる方便であったとしても、そこで表明された原則が現実になっているならば、批判する者はいないだろう。しかし、バイカーは、アブレウがエリート集団形成のために、費用を使っているという「現実」からアブレウの理念の非現実性を非難している。オーケストラは人件費や会場費等膨大な資金が必要であるが、これまでの活動では職業としての活動ではなく、青少年オーケストラである以上、人件費等はかからないものだったが、アブレウがとった方向性は、莫大な資金を必要とするものだった。地方に拠点を作るには、練習会場の建設、指導者の雇用、楽器の費用が必要である。こうした費用を、アブレウは広い人脈と政治力を駆使して政府に認めさせていった。そしてその際「文化省」の予算ではなく、青年省¹⁶⁾の予算として認めさせた。タンストールは、次のようなアブレウの言葉を紹介している。

芸術振興ではなく、音楽を活用した青少年育成プログラムとして支援してほしいと、ペレス大統領に頼みました。当時のベネズエラには青少年問題に特化した役所があったので、そこに支援してもらうのが理想的だと思いました。

青少年（現在の人民権力青年省）では、特に低所得者層の子どもたちと若者を支援することに、当時熱心に取りこんでいたからです。一般的に音楽家が優先したいこととは違うでしょうが、私にとっては、若い人たちを助けることがいつも最優先でした¹⁷⁾。

音楽による社会変革という現在のスローガンを当初からもっていて、それを実現しようとしたのだという見解である。山田の見解は多少異なる。

時は1970年代半ばのベネズエラである。先進国にオイルショックを与えた大幅な原油高を背景にベネズエラの経済は好調で、ペレス大統領による

「グラン・ベネズエラ」計画を実行するなど、大規模な公共投資、社会投資が行われていた時代を背景にしている。

政治家出身であり、財政の仕組みにも詳しいホセ・アントニオに、当時どこに新たな活動の賛同者がいるのか、或いは、新たな活動の資金源が存在しているのか、という嗅覚が働いたとしても不思議でない¹⁸⁾。

そして、音楽にあまり縁がない地域での音楽活動に興味をそそられた可能性があるとして解釈している。つまり当時の社会状況で行われていたことを、正確に認識し、それを巧みに利用したという解釈だろう。もちろん、山田からみれば、その後の進展が肯定的な運動を生み出したことから、動機を問題とはしない。

しかし、ベイカーは、アブレウの意図と現実の相違が、エル・システムの「真実」なのだという問題意識で批判する。

エル・システムは長いチャベス政権の下で特に重視されてきたので、社会主義的な改良的政策の一環であると、認識されることも多いが、アブレウはもともとペレス政権で重視された人物であり、エリートの新自由主義者であった。チャベスには擦り寄っただけだ¹⁹⁾。もし本当にアブレウが貧しい者が音楽を通して豊かになることを目指しているならば、地方のヌクレオの条件を向上させるはずであるが、アブレウにとって音楽はビジネスであるので、効率的な資金の使い方になっている²⁰⁾。後述するようにエル・システムの教育の特質のひとつがpeer teachingであるが、音楽指導者の柱はやはり職業的な教師や指揮者である。オーケストラの練習は合奏（指揮者が指導）、パート練習（楽器の専門家の指導）、個人練習（楽器の専門家の指導）と、指導者が楽器の種類だけ必要であり、膨大な人件費がかかる。Peer teachingとして上級者が教えることで、人件費を抑えているが、教える上級者も無償ではなく、アルバイト的な謝礼が払われる。そのことによって、練習により専念できる条件が保障されているのだが、それでも職業としてエル・システムで指導している音楽家のための人件費は膨大なものになる。しかし、その人件費が低いだけではなく、遅

配がちになり、教師たちは極めて劣悪な生活条件を強いられており、ストライキ騒動まであったという²¹⁾。他方カラカスのオーケストラは、帰国後シモン・ポリバル交響楽団となり、若いメンバーによってその後シモン・ポリバル・ユース・オーケストラが分離するのだが、これらは事実上プロとして練習し演奏しているので、給与が支払われている。ベイカーはその給与が地方指導者よりも高額で、海外演奏旅行やレコーディングなどで、優雅な生活が保障されており、そのために優秀な若者たちが、それを目指して熾烈な競争を演じる「競争社会」になっていると指摘する²²⁾。

この時期の拡大を簡単に整理しておこう。

1978年にJLJOをシモン・ポリバル交響楽団に名称変更した。

1979年政府が正式に支援を決め、ナショナル・ユース・シンフォニー財団（FESNOJIV）が設立され、その後の財政を支えることになる。またシモン・ポリバル音楽院が設立され、この時期ヌクレオが各地に設立されている。

発展

1980年代は過渡期といえるが、いくつかの発展があった。第一に、地方にユース・オーケストラが多数設置され、単なる合奏体ではなく、音楽教室という教育的要素が付加されるようになった。そして、オーケストラがピラミッド的に形成され、オーディションを経て上級に進み、最終的にはカラカスのシモン・ポリバル交響楽団のメンバーとなるシステムが形成された。上級オーケストラに参加するための経済的援助も拡充してきた。

第二にアブレウがペレス大統領の下で文化大臣になったことである。このことはエル・システムをベネズエラ全土に拡大し、認知させていく上で、大いに有利な土台となった。

第三にズービン・メータが指揮者として登場したことである。これはエル・システムが国際的な評価を得るために重要なステップになった。後にバレンボイム、シノポリ、アバド、ラトルなどの文字通り国際的にトップの指揮者がエル・システムを指導し、レコーディングし、称賛するようになるが、メータはその嚆矢であった。そうしたトップの演奏家によって広報されることが、エル・シ

ステマの地位を飛躍的に高めることになったことは間違いない。

1990年代は再び大きな展開を見せた時期であった。

70年代から80年代にかけてのペレス政権（間にカンピンス、ルシンチ政権がある）は、文字通り石油ショックにおける国家財政増大の時期であったが、主に富裕層に分配する政策をとったために、ベネズエラでの経済格差が極端に広がった時代とされている。暴動やチャベスによるクーデタなど、社会不安も広がっていた。ペレス政権は93年に終わり、カルデラ政権を経て98年にチャベスが政権につくと、エル・システムも大きな展開を示すことになる。チャベスは社会主義を標榜し、キューバとの国交を重視し、アメリカには表向き激しい非難を浴びせた。それまでの富裕層中心の政治を貧困層中心の政治に変更したために、今度は富裕層からの非難が強まった。

さて変化はチャベス政権の前から始まっていた。それは1994年政権についてカルデラの中道左派の性格と符合しているといえる。

80年代からこの時期までは、基本的に中央のシモン・ボリバル交響楽団は演奏と演奏旅行を活発に行い、様々な指揮者を招いて、音楽的な力量を高めていた。そして、地方のヌクレオも拡大していた。それに対して1995年のハンディキャップをもつ子どものための「特別教育プログラム」立ち上げは、エル・システムの性格を変えるものだったといえる。これはやがて1999年の「白い手の合唱団」へと展開していくが、障害をもった子どもたちを音楽活動に積極的に参加させる活動を始めた。（「白い手の合唱団」は後述）

1997年には、ロスチャロスの青少年保護センターにエル・システムを導入し、罪を犯した子どもたちをエル・システムの中で矯正していくことを目指した。（この点は「下」で既に詳しく述べている。）そして、この発展として、2007年には刑務所にエル・システムが導入されている。この一連の動向は、現在のエル・システムの象徴的スローガンである「音楽による社会変革」「オーケストラによって貧困から脱出する」というエル・システムの特質と認識されていることが、1990年

代の半ばから開始されたことを示している。

オーケストラの運営も変化があった。1999年に、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ（以下SBYO）が分離し、ドゥダメルが指揮者となったことである。この後エル・システムはこのオーケストラとドゥダメルによって象徴されるイメージとなったほどに、大きな意味をもった²³⁾。そして、2004年にドゥダメルがマーラー国際コンクールで優勝すると、一気に国際的な知名度があがり、このコンビで海外演奏旅行を頻繁に行うようになり、更にその模様を中心とする映像がエル・システム本部や各国の放送局によって作成され、市販されたり放映されていった。国際的な広報活動も緻密に行われるようになった。

2007年からは、米州開発銀行（IDB）の融資を受けるようになり、財政規模が更に拡大することになった。

音楽的側面

七原則

エル・システムが国際的な注目を集めたのは、SBYOのような若者が、しかも貧困層から出てきて、高いレベルの演奏をすることに対する驚きであった。彼らの多くは貧困層ではないので、そこには誤解があるのだが、しかし、比較的恵まれた環境で楽器を修得してきた先進国のユース・オーケストラの水準と比較して、違う次元のレベルに達していることを考えれば、やはり、エル・システムの到達点が極めて高く、その理由を分析する必要があると、各国の音楽関係者が感じたのは当然である。ここでは主にオーケストラの力量が高くなることの理由を考えてみる。そこには以下のような七つの原則での活動があるように思われる²⁴⁾。

第一原則「高い目標を掲げる」

エル・システムが出発した11名のオーケストラの時から、アブレウは他の人たちが「空想的」と批判するのを受け入れず、直ぐに公開演奏会を予定し、しかもそこに政府関係者などを招待した。そして翌年には国際音楽祭に参加するなど、誰も考えないような高い目標を具体的に掲げ、それに

向けて最大限の努力をする姿勢を堅持している。現在の教育方法の部分にも次のように書かれている。

教授-学習課程は、エル・システムのメンバーとして、日々の練習と継続を通して補われ、活動と成果を継続的な学習を意味あるものにするために、多数の公開演奏をスクレオにおける活動と結びつけるのである²⁵⁾。

ニコラスによると、どのオーケストラも年平均26回もの演奏会をする²⁶⁾。そして、その高い目標を実現するのはハードな練習である。通常のスクレオで、練習は最低週5日あり、毎回3~4時間の練習が行われる。演奏会前や上級のオーケストラの場合、もっと長い練習がある。科学的根拠はないが10000時間の法則に照らすと、4歳で始めた場合12~13歳くらいに10000時間の練習に到達するので、中学生レベルでマーラーなどを弾きこなす技術を身につけるようになるのは、不思議なことではないのである²⁷⁾。

第二原則「全ての者に機会を提供する」

エル・システムのホームページによると、入会するための必要条件は以下の通りである。

- ・関係者と親類のデータとともに、記入すべき部分を埋め、完成させること
- ・関係者の写真の証明書2枚をもっていること
- ・その書類がない場合には、出生証明書のコピー
- ・一人の親類の証明書の書類のコピー
- ・入会は無料で、かつ月々の支払いもない²⁸⁾。

更に選抜試験はないことが明記されている。オーケストラの楽器は高価であり、通常は個人レッスンを受けて上達してから入るので、普通の国では経済的なゆとりのない家庭では、子どもにオーケストラに参加させることはできない。しかし、エル・システムは無償で楽器も貸与される。楽器は後述するように、国中に工房があり、エル・システムのために大量の楽器を製作している。このように費用の点で参加できない者はいないが、親が子どもの送迎や演奏会のときに聴くこと、家庭での練習等に協力的であることなどは求められる²⁹⁾。

第三原則「オーケストラから始める」

この原則が各国の音楽関係者に大きな問題提起となった。通常、オーケストラの楽器を学ぶ者はまず個人レッスンから始める。日本のような部活としての吹奏楽をやる場合には、最初から合奏に入ることを前提に楽器を始めるが、それでも初心者はずまず楽器を個人的に練習して、ある程度吹けるようになって合奏に加わるのではないだろうか。しかし、エル・システムでは、個人レッスンの期間は設定しないのが普通である。もちろん、最初から楽器を演奏できるわけではないので、歌や身体運動、ソルフェージュなどを行い、楽器をもつ前に「紙楽器」で姿勢や身体の動かした、また、丁寧な楽器の扱いなどを学ぶ。すべて個人ではなく、一緒に行う活動である。

では何故個人ではなく、最初からオーケストラ活動に加わるのがよいのか。それは、人間は個人よりも集団の中で楽しむことが多く、特に音楽は個人で演奏するよりも、集団で演奏することで、より楽しく、練習の難しさにも耐えられるものだからである。ダンスや歌を取り入れ、遊びの感覚で音楽に入っていくことができるメリットもある。学び方についてエル・システムのホームページは次のように説明している。

最初の段階では、歌、拍手、リズム、笛、ささやき、打楽器、弦楽器、合唱のなかでの動作などを試します。その方法は、子どもの傾向をオケの方向に導いていきます。あるいは、合唱グループのなかでの役割をもつこともあります。

少しずつ、音楽楽器の様々な側面に親しむようになって、その後選択します。それは専門の教師が認識します。子どもの大きさ、身体的特徴、興味、才能などによって、楽器を決めます。その後、子どもたちは、合唱、理論、オケ、ハーモニー、技術、音楽言語などの授業をとりま³⁰⁾。

ニコラスは、当初から合奏をする方法を革命的と評価し、単に音楽的な能力だけではなく、責任感やメンバーの一体感を高めることができるとしている。しかし、前述したpeer teachingは専門家ではない人が間違っ³¹⁾たことを教えてしまう欠点があるとも指摘している。しかし、かなり長い練

習時間をこなし、その間専門家が見る機会が長時間あり、間違いを正すことができるので、大きな欠点ではないとも書いている³¹⁾。

第四原則「能力に応じたオーケストラ」

集団で行う実践については、オーケストラに限らず、合唱やスポーツ、全てにあてはまる「能力の段階」の問題を合理的に処理できるシステムが必要である。アブレウは当初から、来る者は拒まずの原則をたてていたので、必然的に能力格差や選抜の必要性が生じたし、更に数十万人を対象とする国家的活動になっている現在では、重要な課題である。エル・システムは、初心者からプロ級のオーケストラまで、段階に分け、ピラミッド型に構成することで解決している。ヌクレオにはほとんどが初心者のオーケストラがあり、人数の多いヌクレオには中級、上級のオーケストラを配置する。上級のオーケストラは都市部に配置され、もっともレベルの高い全国的な選抜オーケストラはカラカスに置かれている。

どのような段階のオーケストラでも必ず演奏するレパートリーが決められており、(ベートーヴェン、チャイコフスキー、マーラーなど) 移行してもスムーズに入って行けるように工夫されている。そして、上級への進級はオーディションによる。不合格になる場合も少なくない。上級に進みたい者はそれだけ一生懸命に練習する必要がある。上級に進みたいというインセンティブはより進んだ演奏をしたいというものだけではなく、上級のオーケストラに行くほど給与が支給されるからである。上級の団員は下級のオーケストラの指導を行うことで、謝礼が出る。また、カラカスの選抜オーケストラに入ると、練習がほとんど毎日あるために、アルバイトなどをしなくて済む様に、生活できる給与が保障される。しかも、海外の演奏旅行などにも参加することができるし、国際的に有名な指揮者の下で演奏することも稀ではない³²⁾。結局は、職業的な音楽家を目指す人々にとっては、一つ一つが競争で、上級オーケストラと下級オーケストラでは環境が大きく異なるので、必死になる者も少なくない。バイカーはここでも、あまりに練習が長く、子どもたちは考える時間がない、あるいは、待遇が上級に偏り過ぎ、競争が

激しすぎて団員間の雰囲気が悪くなっている傾向があると批判している³³⁾。エル・システムを単なる教育システムと見るか、あるいは国際社会に向けた人的資源の育成と見るかで、この評価は異なってくるだろうが、現在のエル・システム運営者が明確に後者であれば、こうしたインセンティブの組織と、選抜されたレベルの高いオーケストラの育成は必要な要素と考えざるをえないとも言えるが、次の原則がある以上、後者とも言い切れず、エル・システムの中にある基本的な異質な方向性があるともいえる。

第五原則「音楽を通じた社会変革」

音楽と無縁なひとたちも、エル・システムで最も感動を受けるのは、音楽を通じた社会変革、言い換えれば、音楽を通して貧困問題を解決するという原則だろう。

この原則については、強く共感する人と、疑問をもつ人に明確に分かれるのではないだろうが。

多くの子どもたちが、特に貧困家庭の子どもたちがエル・システムに参加するのは、犯罪にあわない環境を確保するためであった。統計上確かにカラカスの犯罪数は国際的にも極めて高い。エル・システムの映像に出てくる子どもたちは、口々に街を歩いているだけでも流れ弾にあたることもあり、自分も危ない目にあつたことがあると発言している。またエル・システムに参加していない兄が麻薬に溺れ、麻薬絡みの犯罪に巻き込まれて負傷したという弟の報告をしている映像もある。こうした環境で、放課後外で遊ぶことは危険であり、オーケストラに参加して建物に入っていれば、犯罪に巻き込まれることはほとんどない。エル・システムで育ち、最も早く国際的に有名になったエディクソン・ルイスも、母親が危険に巻き込まれないように、エル・システムに参加させたのである。(後述) この点については、バイカーもその意義を認めているが、逆に危険な地域にあるヌクレオに上級の団員が教師として教えに行くことの危険性を指摘している³⁴⁾。

ではそのような消極的な意味での保護的性質を超えて、積極的に社会的な問題を解決する能力が、オーケストラ運動にあるのだろうか。

アブレウは、こうした社会変革的な領域で、印

象的な名言をたくさん残している。

「貧困は無名性を引き起こす。」

「オーケストラは、喜び、動機付け、チームワーク、成功を意味する。音楽的幸福と希望をコミュニティの中に創造する。」

「音楽が自身の中につくりだす大きな精神的な世界は、物質的貧困を終わらせる。」

「一緒に歌い、演奏することは、親密に共存することを意味する。」

「貧しい者の文化は、貧しい文化であってはならない。」

エル・システムの中で最も懸命に練習に励み、上級オーケストラに入ろうとしている者は、将来プロの音楽家になることを志している者たちだろう。彼らももし貧しければ、物質的な豊かさを実現する手段としてエル・システムがあり、「貧しさから抜ける」ことができる方法である。それを実現した者は確かに少数だが存在する。

しかし、多くの子どもたちにとっては、オーケストラで演奏することが、精神的豊かさを実現し、物質的貧しさを克服しているといえるのか。（後述）

第六原則「家族と地域の協力」

エル・システムでは「家族」が常に強調されている。ドゥダメルは常に、エル・システムがひとつの家族のようだと語っているし、アブレウも公式に家族の価値を常に表明している。「このプログラムは音楽を通してはいるけれども、社会的なものだということを国家は理解している。貧困は、孤独、悲しみ、無名性を意味している。オーケストラは、喜び、動機付け、チームワーク、成功への喚起を意味している。大きな家族であり、調和が形成され、人間的な存在へ、音楽だけがもたらす美しいものを実現している。」³⁵⁾ またエル・システムのホームページも活動が家庭に対する積極的な効果があるという研究を紹介している。

エル・システムは、子どもに対して、大人になって、成功したり、生産的になったり、そして、幸福になる準備をする。生活する日々のすべてにおいて、創造的なシステムのなかで、学んだり、参加したりして、専門家、労働者、父、母、地域住民になっていくのである。オケや合

唱で音楽を学ぶことによって、寛容性、友情、しつけ、責任感、目標に向かっての忍耐、将来や家族のためのリーダー性、競争力、展望を育てるのである。

アンデス大学の心理学科の研究による発達研究は、エル・システムの価値の学校は、大きな動機付けへと導かれ、所属意識へとつづき、究極的には、家族や生活しているコミュニケーションへと間接的な拡張する利益すべてを可能とする動機付けへと展開する、ということを示した³⁶⁾。

危険な地域から子どもを守るために、親が子どもを音楽教室まで送迎することや、家での練習への配慮を求めていることから、それが家族の結束を高めることは当然のことだろう。しかし、バイカーはここでも批判をする。特に上級クラスになると遠くに通うことになり、バスや列車で移動するので、親の送迎はなくなるし、大学生の年齢以前でも、家を離れて独り暮らしをする場合もある。そうすると逆に家族との生活が奪われ、家族から引き離されている子どもたちも少なくないバイカーは批判する。まるで宗教のようだとまで書いている³⁷⁾。実際には個別に様々な例があるのだろうが、エル・システムが基本的に家族の協力によって成立し、それが家族の絆を強めていることは否定できないように思われる。プロの音楽家を目指して、家族から離れて、独自の活動の部分を増加させていくことは、多くの分野で見られることであり、エル・システム特有の問題とはいえない。

第七原則「キャリアを開く」

新自由主義政策によって貧困層が増大し、国庫収入が原油に頼っていて、他の産業が育っていない状況では、青年の就職は極めて困難である。それが犯罪の増大にもつながっているわけだが、そのような状況の中で、エル・システムが果たしているキャリア形成の可能性は非常に大きい。エル・システムの出発が、活動の場のない若い音楽家たちのためのオーケストラだったが、発展とともに他のキャリア形成の可能性も拡大してきた。

エル・システムが直接開いているキャリアは、プロとしてのオーケストラ奏者、更にソロへの道。これは熱心なエル・システム参加者の最も高い目

標であるが、かなり才能のある者に限定される。そこまでの実力が無いが音楽の道で生きていきたいと考える者は、教室の指導者となる。2004年の時点で15000人の教師がエル・システムで働いているとされている³⁸⁾。更に人数は不明だが、事務的なスタッフもかなりの数であると考えられる。音楽には関わるが、演奏行為ではなく、楽器工房での楽器製作を希望する者もいる。2012年に15の工房があり、250名のバイオリン制作者がいるとされる³⁹⁾。これらが、エル・システムとして雇用している職種だろう。もちろん、既に数百万を超えている卒業生たちを考えれば、直接エル・システムで働ける者は少ないが、これはどのような領域でも同じだろう⁴⁰⁾。

直接エル・システム関連の仕事につけない者が圧倒的に多いことを考えれば、エル・システムに生活を注ぎ込む人たちのキャリアがどうなるのかという問題は残る。(後述)

何故オーケストラなのか

(下)の問題提起の中で、クラシック音楽の演奏行為は、犯罪抑止効果があるが、その難点は、犯罪少年や非行少年が最も嫌う音楽がクラシック音楽であるという点をあげた。如何に音楽そのものに効果があっても、そこにアクセスしなければ活動そのものが始まらない。しかし、エル・システムが貧困からの脱出や、非行からの矯正の活動を押し出し、30万人もの子どもたちを参加させていることを知って、クラシック音楽であることに加えて、オーケストラであることが必要条件であることを知ったのである。

アブレウ自身は次のように答えている。

オーケストラの演奏とは何ですか？ オーケストラのなかでは、能力の水準に対応したところがどこか、感じるのである。第一トランペットは、経済状態や父親が誰かに関係なく、第一トランペットなのです。誰でも、その能力に応じて地位を獲得する。このオーケストラは、非常に民主的な構造で、非常に平等です。第二に、オーケストラは、共通の目的のために努力することが何を意味するかを隠喩しています⁴¹⁾。

エル・システムを音楽面から批判する中に、ク

ラシック音楽に限定していること、オーケストラ中心であることを批判し、ジャズ、民族音楽⁴²⁾、など他のジャンルの音楽の方がより効果的である、室内楽などの小さな合奏の方が教育的に効果がある、あるいは、現代音楽を無視しているなどの批判的見解がある⁴³⁾。音楽研究者の世界では、民族音楽がエル・システムの中で重視されていることが認められている。「議論の中の音楽」という討論シリーズで、ベネズエラの取り組みが紹介され、シモン・ポリバル交響楽団がベネズエラ音楽を演奏している⁴⁴⁾。またニコラスは、ベネズエラの民衆音楽がエル・システムの中で日常的に取り入れられていると書いている⁴⁵⁾。更に、エル・システムでの楽器製作部門では、民衆音楽のための楽器も製作している⁴⁶⁾。

このように、決して民衆音楽、民族音楽、そして現代音楽を無視しているわけではないが、大規模なオーケストラを軸に、古典的な音楽を中心に演奏していることは間違いない。しかし、エル・システムがベネズエラ中の子ども、青少年を対象としている国民的な運動であることを考えれば、少なくとも音楽活動としては、クラシック音楽のオーケストラであることは必然的である。

第一に、オーケストラは大きな人数による共同作業であり、多様な楽器を含んでいること。人間は本来社会的動物であり、個としてよりは、集団として行動することが、人間の感性として安定していることが多い。従って、一人で練習するよりも、集団で練習する方が、はるかに練習効率が高いことは、経験的に知られている⁴⁷⁾。エル・システムの特徴であるpeer teachingはこの人間的性質に根ざしているし、また、学校が集団を軸に教育活動を行うのも、同様である。しかも、オーケストラは集団形成上の条件を最も満たしている形態である。同じ目的をもった集団であっても、皆が同質ではなく、様々な個性があり、技能や好みも異なっている。オーケストラは弦楽器、管楽器、打楽器と全く音楽的性質や演奏技術の異なる楽器群に分かれ、その群の中でも更に数種類に分かれている。音楽が好きであれば、必ず自分の気に入る楽器に出会えるものである。

第二に、いくらでも大人数を受容できる点であ

る。アブレウは、スポーツとオーケストラの比較を質問されて、スポーツは短い期間でラディカルな改善を示すことはあまりない、ひとつのチームで200名も抱えることはできない、そして、オーケストラのレパートリーのような多様な挑戦があるわけではない、とオーケストラの優位性を主張している⁴⁸⁾。もちろん、アブレウはサッカーなどが子どもたちを組織し、成長させることを認めているが、やはり、人数や多様性の点で、サッカーはオーケストラには代わり得ないと考えている。ひとつのクラブチームに200名の子どもが属することはもちろん珍しくないだろうが、試合に出られるのは最大15名である。200名中9割はベンチに入ることもできない。10回の試合をすることで、全員が出られるようにしているサッカーチームはないだろう。どうしても少数のレギュラーと多数の補欠に分かれざるをえない。

しかし、オーケストラであれば200名と一緒に舞台に出て演奏することができる。事実、SBYOが世界を廻って、観衆を驚かせたのは、舞台上に乗る演奏者の圧倒的な量であり、彼らの出す巨大な音だった。もちろん、巨大でありながら、精緻で正確な演奏だったわけだが、これはオーケストラだからできることであり、他に同じことが可能な団体はないと思われる。

第三に、オーケストラは、世界基準が確立している芸術団体だという点である。バーンスタインは、若いころニューヨーク・フィルハーモニーを使って、テレビ用に「青少年のためのコンサート」を何度か主催しているが、そのなかに「クラシック音楽とは何か」と題する回があり、そこで「クラシック音楽とは楽譜に書かれたことを忠実に演奏する音楽、あるいは、忠実に演奏することを意図して作曲された音楽」と定義している。「楽譜」は、ハワード・グッドールによって「音楽史を変えた五つの発明」のひとつとされているが⁴⁹⁾、正確に楽譜に書かれていることを演奏することが、世界中で共通の演奏が可能となり、国内、国際的な交流が可能になる。『プロミス・オヴ・ミュージック』と題するエル・システム広報のビデオがあるが、そのなかで、最年少の全国選抜オーケストラの結成大会の様が見られる。300名近い小学生・

中学生たちが、初めて顔を合わせながら、マーラーの『巨人』やチャイコフスキーの第四交響曲を見事に演奏している。同じことは世界選抜であっても可能だろう。これは、同じことを目指し、同じ活動をどこでも実践することが可能で、初めて会う人たちとの共同作業が可能になることを意味する。全国的な青少年の運動として、オーケストラはこの点でも非常に目的合理的な集団なのである。

バイカーの対置するジャズ、室内楽、民衆音楽の小バンドなどは、それを軸とした場合には、とうてい数十万人規模の活動にはなり得ないし、当然200名と一緒に演奏することも不可能である。他方、実際に室内楽や民族音楽の小合奏体による演奏はエル・システムの中に存在し、オーケストラから派生した活動として行われている。

エル・システムの教育法

エル・システムが世界の音楽関係者や音楽ファンを驚かせたのは、通常の3倍程度の大人数による青少年オーケストラが、一条乱れない完璧なテクニックで、難曲を弾きこなしただけにあって、そして何故そのようなことが可能になったのか、研究が始まったのである。

では実際にユース・オーケストラの実力はどうか。前述した小中学生を中心としたオーケストラが、2013年にザルツブルク音楽祭に出演したときの映像が市販されている。元々4管編成の大オーケストラを必要とするマーラーの巨人を、倍管で演奏しているが、この難曲を危なげなく演奏しているだけではなく、多くの団員が暗譜しているように見える。だから、テンポの微妙な変化にも問題なく適応している。

世界的なテノール歌手であるヴィラズンが司会を務める「明日のスターたち」というドイツのテレビ番組があるが、そこにベルリンの若者によるユース・オーケストラが伴奏をつけるために出演している。オーディションを経た選抜チームだと思われるが、エル・システムのオーケストラとの力量差は歴然たるものがある⁵⁰⁾。

エル・システムの出発時においては、音楽大学卒業生を中心とした通常のオーケストラだったから、特別な教育方式があったわけではない。しか

し、地方にユース・オーケストラを設立し、それが多数となり、しかも初心者が増えるに従って、伝統的なクラシック音楽の楽器習得法は全く通用しなくなった。音符も読めない子どもたちに、高いレベルの音楽を要求するアブレウに対して、多くの人たちが不可能だという意見をぶつけたのは当然だろう。アブレウはこの点で妥協することはなかったが、膨大な初心者の子もたちをどのように訓練していくかは、様々な模索と試みから生み出されてきたといえる。その特質を繰り返しの点もあるが整理しておく。

エル・システムの最大の特質は、練習時間の長さである。そしてこの長時間練習を支えているのが、合奏を基本にしている集団活動である。また、社会的背景としては、そのことが安全を確保する面もある。

第二に、集団で学ぶのに適切な様々なメソッドを取り入れていることである。山田は、スズキメソッドを取り入れる事情を詳しく紹介している⁵¹⁾。

山田真一は、エル・システムの初期に、小林武史が、エル・システムの指導者として招待されたが、現地の体制が全くできていなかったため、帰ろうとしたとき、アブレウが懸命に小林を説得し、不承不承残った小林が、あらゆる条件が貧困な状態で何をするか迷ったあげく、スズキメソッドの方法で指導したところ、それが非常な効果をあげたので、エル・システム側もスズキメソッドを積極的に活用するようになったのだと紹介している。

スズキメソッドとは、鈴木真一が作り上げたバイオリンを中心とする楽器練習法であるが、その特質は、言語修得過程と音楽修得過程が基本的に一致するという前提で、まず音感をつけることから始め、ある程度の音感ができた段階で初めて楽譜を導入すること、厳格に段階を踏んで作成された教則本にそって進めることと考えられる。早くは江藤俊哉、諏訪根自子、近年では宮田大、山田晃子、鈴木玲子など世界的な演奏家を育てた実績をもつ、国際的に高く評価されるメソッドである。

では、どこが優れているのか。

その最大の秘訣は、弦楽器共通の練習曲の1番

にあると考える。それは「きらきら星」の主題による変奏曲であるが、子どもが初めて楽器をもって弾くのに、確かに効果的であると考えられる。

- 1 第一ポジションですべて弾ける。
- 2 運動機能性を重視しており、弾いていて身体的な快感がある。
- 3 音の変化のほとんどが長・短2度で、しかも単純な音階的移動である。
- 4 開放弦による移弦があり、最初から簡単ではあるが重要なことを学べる。

とくに2の運動機能性を重視した、しかし、やさしく弾ける曲から入ることが、スズキメソッドを自発的な練習に誘う要因であると考えられる。そして、この曲は、合奏にも極めて向いていることも見逃せない。

ニコラは、鈴木、コダイ、ダルクロゼ、オルフのメソッドを応用し、更にいろいろとテストして、ベネズエラに最適なものを採用していると指摘している⁵²⁾。

第三に、個人レッスン、パート練習、合奏を組み合わせている点である。この中で上級者が下級者を教えるpeer teachingが広く取り入れられているが、教えることで自らを省みる機会となる点で、上級者にとっても大きな教育効果があるといえる。

ここで、音楽理論の学習について簡単に触れておきたい。エル・システムは、単なるオーケストラの組織ではなく、音楽院と結合された組織である。カラカスには、シモン・ポリバル音楽院があり、各地のスクレオも音楽学校という形をとっている。それは、単に演奏技術を学ぶのではなく、音楽理論を合わせて学ぶ必要があると考えられたからであり、実際に演奏とともに音楽理論を学ぶスタイルになっている。しかし、ベイカーは、それは初期のことで、近年は理論的な学習はなされておらず、従って、エル・システムの子もたちは技術偏重で考える力がないと批判している⁵³⁾。40万人の子もたちが学んでいることを考えれば、技術に加えて、全員が理論を学ばせることは極めて難しいことであり、程度の問題であろうが、少なくとも音楽のプロになろうとする者が在籍する中央の選抜オーケストラでは、音楽院と併設さ

れているので、理論を学ぶ機会が保障されている
とあってよいだろう⁵⁴⁾。

成功したスター

いかなる活動も、「結果」を認められなければ、社会的承認を得ることはできない。エル・システムにおいては、ユース・オーケストラの圧倒的な演奏以外に、多数の国際的に高い評価を受けている若手音楽家を輩出したことがエル・システムの評価につながった。

(1) エディクソン・ルイス

エディクソン・ルイスは、エル・システムの生んだ最初のスターである。しかも、最も典型的なエル・システム出身者とも考えられている。ルイスは、母子家庭に育ったが、危険なカラカス地域での生活であったために、母親が、犯罪から守るために、ルイスを11歳のときにエル・システムに入れたという経歴が注目されている。それが初めての楽器体験であったという。めきめきと腕をあげたルイスは15歳のときにアメリカのミネアポリスで開かれた国際コンクールで優勝し、その後ベルリンのアカデミー（ベルリンフィルが運営している若い音楽家の養成機関）に留学し、そして17歳というベルリンフィル史上最年少で採用され、19歳で正式メンバーとなっている。（ベルリンフィルが若い音楽家を優先する姿勢をとり始めたことが、幸いしたことは事実であるようだ。）⁵⁵⁾

エル・システムなしにコントラバス奏者ルイスは存在しなかっただけでなく、これまで存在しなかったタイプのコントラバス奏者であるともいえる。その端的な現れが、多数の作曲家が、彼のために新作を創っていることである。独奏楽器ではないコントラバスのためのソロの曲は極めて少ないし、これまであった曲も、コントラバス奏者が作曲家に依頼して作ってもらった曲である。しかし、作曲家がルイスの妙技に刺激されて、新しい分野であるコントラバスのソロ曲を多く作曲して、彼に捧げているのであろう。ルイスのホームページによれば、Heinz Holliger, Rudolf Kelterborn, Paul Desenne, Efrain Oscher, Arturo Pantaleon, Matthias Ockert, Luis Antunes Pena, Dai Fujikura, Rudolf Kelterborn and Roland Moserなどがルイ

スに曲を捧げている。

ルイスの長いインタビューがあるので、興味深い部分を紹介しよう。

q 何故、大きなダブルベースを学んだのですか。

A 私は最初ビオラを試したのです。最初の時間は、大惨事でした。短い音符のパスセージを演奏するものだったのです。それは、とても鋭く、高揚したものだったのです。しかし、ダブルベースは、たったひとつの長い音符を弾くだけだったのです。私は、その温かい響きに感動しました。その日から、私は音楽をしなくなり、ベースを弾きなくなりました。私は家の吹き抜けで、何時間も小さなベースで時を過ごしました。最初はうまく弾けませんでした。しかし、私は信じがたいほどに私の音楽に誇りをもって、私のまわりのすべての人を感動させたかったのです。

q エル・システムの背後にあるモチベーションをどのように考えますか。

A ベネズエラの人口のおよそ80%は貧困です。しかし、オーケストラは、すべての人に可能で、社会の落ちこぼれの人にとってもそうです。しかし、それはセンチメンタリズムで組織されているわけではありません。まさしく、エリートの構造を打ち砕くために、音楽を使うのです。創立者のアブレウ博士は、ベネズエラの子どもたちに尽くすことに生涯を捧げました。彼の理念は、「貧しい者のための文化は、貧しい文化であってはならない」というものでした。それは、子どもたちは何か役に立つことをしているという確信を起こさせました。ドラッグや犯罪で手っとり早くたくさんのお金を得ることはできます。しかし、そうした誘惑に対抗することは、勇気や意思が必要なのです。エル・システムでは、子どもたちは芸術を創造します。彼らは訓練され、一緒に到達しようという目標をもちます⁵⁶⁾。

この後ルイスは、12歳の時に母が失業し、タクシー運転手になったが、危険な仕事だったので、母を助けようと思い、アブレウに相談したところ、給与付きのユース・オーケストラのメンバーにし

てくれたと語っている⁵⁷⁾。そして、練習について次のように語っている。

q 子どもたちは、何を達成しようと努力しているのですか。

A 完全さです。もし、あなたが、システムに受け入れられたら、喜んで定期的に練習するに違いありません。音楽は、学校と宿題に加えて、毎週6日間行われます。きっちりとした方法で、パートと楽器の相互連想を経験します。民主主義が行われています。誰もが全員を尊敬しています。ごく自然に討論も起きます。討論もその一部であり、相互作用の一部なのです。我々音楽家は、音楽に奉仕します。個人主義や無秩序とは無縁です。これは、社会の構造にもとてもよく応用できます。暴力や混乱よりも価値についてなのです。

q オーケストラが人生の教訓を教えるということでしょうか。

A オーケストラは、協力関係のなかでふらつくことのないしっかりとした共同体です。子どもたちは、少年オーケストラで単に楽器の演奏を学ぶではありません。どうやってお互い聞き合うか、合わせるか、感情を一致させ、アーティキュレーションをそろえるのかなどを経験するのです。訓練がゴールへの道を導きます。人格を發展させます。他の人の信念のなかにも人格がある故に、自分自身の信念も發展させるのです。自分と他の人に対して責任をとることを学びます。ベネズエラでオーケストラの楽器を学んでいる子どもは、最初の日から、グループやアンサンブルの一部のなかで学ぶのです。音楽をすることは、最初から社会的行為なのです。

ルイスは、単に長い時間の練習だけではなく、そこで討論に基づいた相互認識の過程があることを述べている。それが社会的訓練になっており、またドラッグなどの誘惑から守っているという⁵⁸⁾。

(2) ドウダメル

グスターボ・ドウダメルは、エル・システムの生んだ最大のスターであり、クラシック音楽のファンでドウダメルを知らない者はいないだろう。日本にも、SBYOだけではなく、ミラノ・ス

カラ座のオペラ公演や、ウィーンフィルの指揮者として来日している⁵⁹⁾。

ドウダメルについては語り尽くされているので、この論文に関係することを簡単に整理しておくにとどめる。

ドウダメルはエル・システムが貧困層から出てきた音楽家集団と言われる典型ではない⁶⁰⁾。ドウダメルはベネズエラの中では中間層に属す音楽的家庭で音楽に満たされて育った。小さい頃から指揮者に憧れていたという。

ドウダメルがエル・システムの中で、抜きんでて頭角を現し、国際的なスターになったのは、エル・システムの中で切磋琢磨して成長した側面に加えて、特別な才能を認められて、エル・システムの中で英才教育を施されたからである。

音楽一家に生まれたドウダメルは、小さい頃から音楽教室に通い、歌、ピアノ、フルートを習っていたが、7歳でバイオリンを始め、バルキシメト⁶¹⁾のエル・システムのオーケストラに入り、コンサート・マスターとなった。ある日指揮者が遅刻したときに、ドウダメルが指揮していたが、それを見た指揮者が才能を認め、12歳で指揮者としての活動も始めた。アプレウに認められてカラカスに移り、18歳のときに、SBYOが、分離して結成されたときに、正規の指揮者となった⁶²⁾。更に、指揮者として活動するだけでなく、指揮者としての訓練を広範囲に受けている。ドウダメルとそのオーケストラは頻繁に海外公演をするようになり、またアバドなどの教えを受ける機会もあった。しかし、山田によると、ファイナルに残った2002年のマゼール・ヴィラール指揮者コンクールを辞退し、2004年のマーラー国際指揮者コンクールに備えて、集中的な勉強をしたという⁶³⁾。その結果、見事マーラー国際指揮者コンクールで優勝して、世界に名前を知られることになったわけである⁶⁴⁾。

バイカーは、ドウダメルがSBYOの指揮者になったときに、それまで指揮者であったグスターボ・メディナのことを頻繁に触れている。メディナは、エル・システムの出発間もない1976年からバイオリン奏者として関わり、その後National Children's Orchestra (国立青少年オーケスト

ラ)⁶⁵の指揮者として活動してきたが、1999年にこのオーケストラがSBYOと改編されたときに、代わりにドゥダメルが指揮者となったために、解任される形になったという。ベイカーによると、メディナは、この指揮者交代に抗議して、El Mundoという新聞に「オーケストラの危機」と題する辞任表明をした。その記事の見出しは「運営の愚かさと彼が受けた迫害」を明らかにしたものだとしている⁶⁶。しかし、冷静に見れば、エル・システムがベネズエラの青少年をオーケストラで救うというスローガンが押し出されており、そのなかで指揮者という柱となる人材を育てるために、ドゥダメルを指揮者にした決定は、その後のエル・システムの発展を見据えたものだったといえる。実際、シモン・ポリバル交響楽団の海外演奏旅行の、音楽界における評価が高かったとしても、社会的に注目されたわけではないし、また、熱狂的に迎えられたわけでもない⁶⁷。しかし、ドゥダメルが初めてSBYOを率いて日本公演を行ったときには、新聞も大きく取り上げるなど、社会的な注目を浴びている⁶⁸。ベイカーはメディナからドゥダメルへの交代を、メディナの立場からアブレウの独裁的な運営の典型と批判しているが、ドゥダメルがバルキシメトのバイオリン奏者からカラカスで指揮の勉強をしていく過程には、多くの推薦があり、決してアブレウの個人的好みで決定されたわけではなく、しかもエル・システムの発展を正確に見据えた人事であったと解釈するのが妥当であろう。

協力者

(1) アバド

エル・システムが国際的に発展するきっかけのひとつは、世界のトップレベルの音楽家、特に指揮者が積極的に紹介、協力したことがある。実際に紹介しただけではなく、演奏会の指揮をしたり、自国に招待したり、あるいは指導をしたりした。こうした活動はメディアが積極的に取り上げ、世界に発信した。こうした活動を積極的に行った音楽家は多数いるが、中でも最も大きな影響力をもち、高い貢献をしたのはクラウディオ・アバドである。

アバドがエル・システムに共感し、積極的な協力を惜しまなかったのは、それまでのアバドの活動とその土台となっている理念のためであろう。

アバド自身、いつかの青少年オーケストラを設立し、実際に指導、演奏しており、そのいずれもがプロオーケストラとして成長し、更に有名オーケストラへの人材供給源となっている⁶⁹。第二に、若い頃から労働者階級に対する音楽活動を活発に行っていた点である。一時期はユーロ・コミュニティの支持者であると噂されたこともあり⁷⁰、ミラノ・スカラ座の特別公演を労働者向けの低料金で行ったり、また、盟友のポリニと行った労働者のためのコンサートのリハーサル風景が映像として市販されている⁷¹。

アバドは1999年にマーラー・ユーゲント・オーケストラとベネズエラに演奏旅行に出かけ、そこでエル・システムの演奏会を聴いて感動し⁷²、ドゥダメルやオーケストラの指導もし、それを継続的に行うようになったばかりではなく、オーケストラはメンバーをヨーロッパに招いて、指導したり演奏の機会を設定したことは多数に及んでいる⁷³。アバドが果たした役割は、世界のトップ指揮者が大々的に共感・協力していることの「影響」だけではなく、実際にリハーサルなどで指導した内容があるだろう。外部の者にはわからないが、アバドが教えた中心は「聴くこと」にあるとルイス・ディアスは書いている⁷⁴。

(2) ラトル

ベルリン・フィルの音楽監督のアバドの地位を継いだサイモン・ラトルは、エル・システム支援者としての役割をも継いだといえる。現在、エル・システムの青少年オーケストラを最も効果的な舞台で活動の場を与えているのがラトルである。2013年のザルツブルグ音楽祭に、ラトルは、ベネズエラ国立児童交響楽団を招待し、自らマーラーの第一交響曲を指揮している。しかも、一部の曲を19歳のヘスース・パラに指揮をさせている⁷⁵。

ラトルの経歴を見る限り、若いころから青少年オーケストラとの活動をしてきたとはいえない。むしろ、ベルリン・フィルの音楽監督に就任したことが、きっかけになったといえるだろう。前任者のアバドの活動と、偶然だろうが、同じ年に入

団したエディクソン・ルイスの存在が大きなきっかけとなったはずである。ルイスから詳しくエル・システムのことを聞いたことで関心を強め、そして、2004年4月にベネズエラを訪れて、マーラーの復活をテレサ・カレーニョ・ユース・オーケストラと演奏して、エル・システムに音楽の未来を発見したと表明した⁷⁶⁾。同じ2004年、ラトルはベルリン・フィルの活動の一環として、「教育プロジェクト」をたちあげ、出身国や文化の異なる250名の子どもたちが、「春の祭典」によるダンスを踊り、ベルリン・フィルが伴奏する実践をした。『ベルリン・フィルと子どもたち』という題の映像として発売され、テレビ放映もされたが、当初熱意のない子どもたちが、6週間の間に変わっていき、最後は大きな感動で終わる。このプロジェクトにエル・システムの精神から学んだ足跡を見いだすのは容易だろう⁷⁷⁾。

ベイカーはアバドについては触れるところがないが、ラトルとエル・システムの関係については繰り返し書いている。ベイカーがエル・システムについて関心をもち、調べるきっかけとなったのは、ラトルが称賛する言葉を聞いたことだったという⁷⁸⁾。しかし、ラトルの言説にふたつの点で批判を加えている。

第一に、ラトルの「エル・システムの子どもたちは、非常によくdisciplineされている」という言葉に対して、おそらくラトルは、音楽に必要な部分をしっかりと身につけ、集団的な活動としても思いやり、礼儀、規律が保たれているという意味で使っていると思われるが、ベイカーはふたつの点で批判する。オーケストラの子どもたちは指揮者に対して絶対服従であり、「しつけ」という点では徹底しているが、自発的なルール感覚や音楽性という点では低く、競争主義が激しいので、思いやりのような感情はむしろ希薄であるとする⁷⁹⁾。ラトルがベネズエラにいて、マーラーの『復活』を演奏したことが語り種になっており、ラトルはそのレベルの高さに感銘を受けたのだが、ベイカーによれば、ラトルが来る前に厳格な選抜と徹底的な練習が行われており、だからラトルが感動してしまうのだと指摘する⁸⁰⁾。有名な指揮者に声をかけて招き、徹底した準備をして感動

させ、それをきっかけにして協力態勢をつくっていく、それはエル・システムの巧妙な戦略だということが、ベイカーの批判の主旨であろう。

楽器製造

楽器を演奏する者は、通常私的に楽器を購入し、私的に習って上達する。当初音楽大学の学生や卒業生を対象にした活動だったときには、楽器の問題はクリアされていたが、広く子どもたちを包摂し、しかも社会的階層に関わりなくオーケストラに参加させる以上、楽器の入手を容易する必要に迫られた。オーケストラの楽器は他の合奏体に比べて格段に高価である⁸¹⁾。アブレウは早い時期からこの問題を考え、手を打った。外国から購入するのは費用がかかり過ぎるので、ベネズエラに工房を設置して、海外から楽器製作の技術者を呼んで、ベネズエラ人を訓練・養成して、全国のオーケストラの楽器を国内製作で賄う計画をたてた。そして、1982年にそれを実行に移したのである。そして楽器製作、メンテナンス、修理、そして技術者養成を総合的に行うEl Centro Academico de Luteria (CAL) を設立した。現在では全国に27の工房があり、300名の奨学生、130名の教師がいるとエル・システムの公式資料は説明している。以下のコースがあり、

弦楽器製作のアシスタント 6カ月720時間

弦楽器製作の技術 18カ月2160時間

弦楽器製作 27カ月3240時間

そして対象とする人材は以下の通りであるが、授業料は無料で、シモン・ボリバル財団から素材は提供される。

- ・楽器の製作や修理に興味がある青年
- ・能力や技術や道具の取り扱いをもっているのに、公式な教育から脱落した若者
- ・学校全体を通じて、登録がオープンであったこと

入学の条件は

- ・9学年度以上であること
- ・14歳から24歳（18歳以下は保護者の承認の文章）
- ・音楽の知識があること（必須ではない）
- ・楽器の修理の経験があること（必須ではない）
- ・本部または近所のCALでカウンセラーと製作教師との面談を実施すること

以上のことでわかるように、楽器製作は、エル・システムのビジョンを実現するための条件整備であるとともに、エル・システムで演奏をしていたが、演奏のプロよりは楽器製作に興味がある者に仕事を提供する場でもある⁸²⁾。奨学金も整備されているので、恵まれた環境にある⁸³⁾。

楽器を製作するシステムは、大きな意味をもったと考えられる。

第一に、楽器を極めて安価に入手することが可能になったことである。日本円では億単位の弦楽器といっても、実際には200年300年経過しているから高価なのであって、それほど劣らない楽器も、数百万で製造が可能である。市場での購入よりは、比較にならないほどの費用節減になる。

第二に、必要な量の楽器を供給できる点である。

第三に、メンテナンス・修理もてがけるので、安心して使用することができるだけでなく、エル・システムの関連施設であり、エル・システム出身者が働いているから、オーケストラの子どもたちが、楽器の正しい使用法を学ぶ機会を設定することもできる⁸⁴⁾。

第四に、雇用を創出した点である。

第五に、国家全体として、大きな産業になる点である。楽器工房が多数設立され、大量の楽器を製作すれば、技術も高くなり、輸出品としての大きな意味をもつ⁸⁵⁾。

将来、ベネズエラが、世界の楽器製造を担う中心勢力のひとつになることは間違いないだろう。

音楽による社会変革

貧困からの脱出

エル・システムが音楽家に与えた衝撃が、オーケストラやソリスト、指揮者たちのレベルの高さであったとすれば、社会に対して感動を与えたのは、音楽による社会変革というスローガンだった。これは政治的主張とも絡むので、大きな論争点でもある。

では、エル・システムにおける音楽による社会変革とは具体的にはどのようなことを指すのか。

- 1 子どもを犯罪から守る。
- 2 子どもを貧困から脱出させる。

3 犯罪や非行に陥った者を立ち直らせる。

これらは当初からのエル・システムの理念ではない。少なくとも3の理念は、ベレス政権の下では強く主張されたことはなく、実際の熱心な取り組みは、チャベス大統領の時代になってからである。そして、1と2については、当初から本当にアブレウなど指導者たちの理念であったのかも、疑問も出されている。

明確なことは、当初純粋なオーケストラ活動であったものが、スコットランドでの音楽祭後、自発的な地方のユース・オーケストラ設立の動きに促された面もあり、オーケストラを各地に設立する意図が芽生え、その資金を引き出すために、青少年保護を目的とすることが、社会的、政治的な了承をえやすいという状況を踏まえて、犯罪や貧困対策としての側面を強調したという事実は否定できない。しかし、他方、アブレウが少年時代に音楽教育を受けた教師が、貧しい者からは謝礼をとらず、興味のある子どもに対して、広く教えていたことを、自分の生き方の参考にしてきたことから、当初からアブレウ自身の中には理念的に確立していたと考えるのも事実に近いと思われる。アブレウの来るもの拒まずという原則は、多くの音楽関係者には反対され、かなり強引にアブレウが押し進めた政策であるとも言われており、アブレウの当初からの信念であったと十分に考えられる。

カラカスでは、犯罪が日常化しており、子どもたちが安心して、放課後を過ごすことができないことは、多くの親に危惧されており、オーケストラが困い地となって、犯罪から子どもを隔離して守る点は、ベイカーも認めている⁸⁶⁾。

子どもを貧困から脱出させるという理念については、検討の余地があるだろう。貧困から脱出したいと考えてエル・システムに参加している子どもは、プロの音楽家となることをまず考えるだろう。プロになれない場合には教師として、あるいは楽器制作者として残ることを目指す。しかし、膨大な参加者から見れば、こうした職業を獲得できる者は、多く見積もっても2~3%程度であろう。その他の圧倒的部分の子どもたちにとって、貧困からの脱出とはどのような意味をもつのか。

- ベイカーはこの点の批判が最も強い。
- ・ 貧困対策を称しているが、アコスタのような人物は例外で、貧困層に積極的に働きかけているというのは事実ではない⁸⁷⁾。
 - ・ 中間層はよい楽器を自費で購入できるので、貸与される貧困層の子どもとは、明らかに格差があり、貧困層は音楽的にも不利である⁸⁸⁾。
 - ・ 資金は豊富だが上級メンバーのために使われていて、多数の下級オーケストラのメンバーは貧しいままである⁸⁹⁾。

要するに、エル・システムは政治的理由で貧困層対策を述べているだけで、実態は中間層以上のための活動なのだというのが、ベイカーの主張の核である⁹⁰⁾。正確な統計はないが、主に貧困層のメンバーの多数は厳しい練習に耐えられず辞めてしまうとベイカーは見ている⁹¹⁾。

こうした批判に対して、エル・システム側の論理は以下のようなものである。

アブレウが繰り返し述べていることは「貧困の悲劇は無名性にある。しかし、オーケストラの活動によって無名性を克服し、豊かな精神性を獲得できる」という点である。似たような発言として、「貧しい者のための文化は貧しい文化であってはならない。」だから、最高の文化であるベートーヴェンやモーツァルト、マーラーなどの音楽が必要である。この点に留まっていれば、エル・システムを宗教だと批判することはたやすいだろう⁹²⁾。

それに対して、「キャリア形成」のところで述べたように、オーケストラは音楽以外の様々資質、責任感、人間的コミュニケーション力、創造性、努力などを学ぶので、譬え音楽の道に進まなくても、他の適性を見つけて、社会にでて活躍できるとする。例えば、刑務所でのエル・システム活動を推進しているレーニン・モラは、SBYOのホルン奏者をしながら、大学の法学部で弁護士資格をとり、国際弁護士として活動している。刑務所の仕事はその適用ともいえる。

刑務所での活動については、(下)で論じているのでここでは触れないが、一点ベイカーの批判について述べておく。ベイカーは、刑務所での活動を称賛しながらも、オーケストラ活動に参加すると奨励金がでること、刑期が短縮されることを

あげて、「利益に釣られている」だけだと批判しているが⁹³⁾、その批判は妥当ではない。刑務所に単に罰する場と考えれば、そうした利益誘導は否定されるべきであるが、更生の場と考えれば、更生に役立つ措置は積極的に奨励されるべきだろう。エル・システムの活動で更生されれば、刑期を短縮して社会に早く出すのは合理的であるし、更に刑務所費用が減少するから、その点でも奨励金は意味がある。問題は、エル・システムの活動をした者が出所した後の再犯率であろう。(下)で紹介したように、刑務所長は、大幅に再犯率が低下したと述べており、更生効果を促進していると評価できる。

障害者の参加

エル・システムの「すべての人に音楽の機会を与える」という理念を最も端的に現しているのが、障害者に対する機会保障である。音楽をする上で、身体に障害があれば楽器演奏が、視覚障害は合奏や合唱が、聴覚障害は音楽そのものが困難である。しかし、パールマン(身体)、和波孝禧、辻井伸行(全盲)など、世界的レベルで活躍している音楽家も存在する。また、右手の機能を失ったピアニストのために作曲された「左手のためのピアノ協奏曲」(ラベル作曲)などもある。

日本の歴史を見ても、琵琶法師は多くが盲目だったという。このように障害者が音楽に関わることはあっても、やはり例外的であり、特に聴覚障害者が演奏することは不可能のように思われていた⁹⁴⁾。エル・システムの切り開いた道は、国際的にも画期的な実践だといえる。

エル・システムが障害者のための「特別教育プログラム」を始めたのは、1995年とされる。当初は障害をもった子どもたちの合唱団であった。当然、オーケストラに参加することができる場合には、希望すれば可能だろうが、楽器を扱うことができない障害の場合でも、合唱は可能な場合が多い。しかも、合唱は身体運動を合わせて行うことによって、障害に対するリハビリテーション効果も期待できる。幼児でエル・システムに参加すると、まず合唱、身体運動、ソルフェージュなどから入るので、障害がある場合には、そのまま合唱に残る形になる。

障害者プログラムを始めたのはバルキシメトのヌクレオで、タンストールが訪問したときには⁹⁵⁾、3000人以上の子どもたちが在籍し、340人は、様々な障害をもった援助が必要な子どもたちだったという⁹⁶⁾。そして、全盲の子どもたちのために、楽譜や書籍の点字化の作業が行われていることを紹介している⁹⁷⁾。

アコスタの指導するロス・チョロスのヌクレオは、900人の子どもが在籍しているが、60人は7歳から22歳の自閉症、アスペルガー、ダウン症の子どもであり、指導者のラファエル・エスピノーザは、彼らは驚くほど発達が早いと述べている⁹⁸⁾。

エル・システムの最も顕著な実績は、聴覚障害の子どもたちの音楽との関わりを実現したことだろう。「白い手の合唱団」と呼ばれる集団は、実際に合唱するわけではなく、白い手袋をはめて、共演する合唱団やオーケストラの音楽に合わせた手を使った身体運動を行う。舞台上に整列するので、ダンスではない。合唱やオーケストラのための指揮者がおり、「白い手の合唱団」の前にもう一人の指揮者がたつ。その指揮者が音楽に合わせて手に表情をつけた動きをすると、それに子どもたちが合わせて動くのである。「白い手の合唱団」は、障害者たちによって構成された合唱団と共に、2013年のザルツブルグ音楽祭に招待されて、2回の演奏会を開いた。前述したように、その模様は映像として市販されている⁹⁹⁾。

彼らが、実際に「音楽」をそのまま感じているのかは不明である。しかし、健常者が聴いているのとは異なる「音楽」であったとしても、彼らの個々の創造した内的音楽を体験しているのかも知れない。少なくとも、彼らの身体的動きは、音楽に合わせてなされているように見える。

一点のみ考えておきたい。それは、こうしたエル・システムの障害者を対象とした実践は「音楽療法」なのかという点である。タンストールは、バルキシメトの「白い手の合唱団」の指導者ゴメスの言葉を紹介している。

「長いこと、障害を持つ人たちの活動は、治療という観点からアプローチするのが普通でした。でも、障害はなくなるものではない。だから、施すべき治療などないのです。」

「子どもたち一人ひとりの『できること』を見つけ、それを伸ばしてあげる。障害は脇へ置いて、その子の持つそれ以外の部分が育つようにするのはです。どんな人にも、才能や潜在能力があり、成長する力がある。そして、人間の魂に障害はありません。」¹⁰⁰⁾

エル・システムでの活動が、障害者にとってネガティブな側面から解放されるならば、それは事実上治療的効果があると考えてもよいから、音楽療法との境を厳密に引く必要はないと思われるが、治療が目的ではなく、あくまでも芸術活動の実践に参加することが目的であり、それを可能にする援助形態を発見することがエル・システムの目的である。

人格の涵養

社会変革という側面の最後として、「人格の涵養」について簡単に触れておこう。

バイカーは著書を出版したあとのインタビューでも、この点についての批判を強調している。

ここでは、訓練、独裁、権威主義、競争、業績主義を超えたボールのヒッパリアいがある。一部は、脚光をあびるが、才能のない子どもたちは、最初の意欲を失って、去っていく¹⁰¹⁾。

他方、何度も紹介しているように、オーケストラの活動は、責任感や協力、コミュニケーションの能力を培う力があるとエル・システムを担っている人たちは繰り返し主張している。

バイカーは、いくつかの研究を参照して、音楽の訓練が知的、モラル的向上には無関係であることがわかったとして、こうしたエル・システムの主張に疑問を投げかけている¹⁰²⁾。

しかし、様々なインタビューに登場する、実際にエル・システムで活動している若者たちが、活動の中で自分が成長したこと、救われたことを多数述べていることも事実である。再びルイスの言葉を見てみよう。

15年前、私自身も路上での誘惑を感じたことがありました。しかし、生活の美的な側面に接してきた人は、また、倫理的な側面を経験しています。人の感覚的な感性が形成されるのです。そして、人の精神的な地平が拡大するのです。貧困というのは、多くの場合、孤独を意味しま

す。無名性と結びつきます。オーケストラは、他方、人生の喜びとチーム精神によって成立します。物質的貧困は、音楽を一緒にすることで、克服できます。何故ならば、多くの子どもは、オーケストラで仕事のために支払いを受けるからです。しかし、私は、そこからもっと先にいかねばならないと思っています。私たちが今ベネズエラで見ていることは、人々がゴールを失っているということを明確に示しています。彼らは、すばやくお金を得たい、有名になりたい、成功したいと考えています。もし、誰もが人生や社会において、現実的に建設的な役割を演じていたならば、私の国の歴史は、違うものになるでしょう。誰もが何か得意なものができるでしょう。しかし、それには、志、訓練、勇気や情熱が必要です。ベネズエラ人は、みんな機会をもっています。自由に生きる機会が¹⁰³⁾。

ベイカーの批判するように、エル・システムからもドロップ・アウトしてしまう子どもたちは少なくないだろうし、他方で競争主義のあまり他人を蹴落とそうとする者もいるだろう。しかし、エル・システムのような活動が人々のモラルを向上させ、人間関係を形成し、そして、譬え音楽の道に進まなくても、エル・システムの中で十分に活動した者は、他の道を適切に探すことができるのではないだろうか。ベイカーのいうように、客観的なデータを蓄積していく必要はあるだろうが。

エル・システムの将来

最後にエル・システムの将来について、考えておこう。ベネズエラ国内で、エル・システムはこれまでの発展を踏まえて、更に多くの子どもたちを参加させ、発展していくことができるのか、また、多数の国に、エル・システムに示唆されたオーケストラ運動が広まっているが、ベネズエラ以外の国の活動が成功するのだろうかという二つの側面がある。

国際的な広がりについては、多くの研究者が、ベネズエラのような規模で発展する国はでないだろうという点で一致しているように思われる¹⁰⁴⁾。ベネズエラで発展した理由が、固有の社会的、文

化的、経済的、政治的背景によるものであり、そうした条件が大幅に異なる他国で、オーケストラというひとつのジャンル、しかも通常はマイナーなジャンルに膨大な子どもたちが集まって活動することは、考えにくいからである。比較的似た社会状況にある南米では、活発に行われているとされているが、特定の分野に多額の国費を投入することができたのは、ベネズエラでは石油という国家が独占的に莫大な利益を得ることができる資源をもっていたからであり、そうした納税者対応を不要とする莫大な国庫収入をもっている国は、他に南米では存在しない。また、南米の他の国では、サッカーという、多数の子どもたちが参加意欲をもち、しかも貧困であっても可能なメジャーな分野が既にある。

移民の子どもが多く、ドゥダメルが指揮者であるロスアンジェルスでは活発にエル・システム的活動が行われているが、地域的に限定されるし、また特別な背景があるからである。

従って、ここではベネズエラでの将来の可能性について考える。まず、ベネズエラでエル・システムが発展した原因と背景を整理しておこう。

- ・アブレウという信念、政治力、人脈、音楽的力量等を高度に兼ね備えたカリスマの指導者が牽引したこと。
- ・政治的に、民主主義的理念と独裁的政治態勢が奇妙に併存する状況が戦前から続いていたこと。平等を求める民衆の声を、独裁者が支持を得るために実現する政治スタイル（ポピュリズム）があったことを意味する。
- ・長い間の政治的混乱で、国民が楽しむ余暇の領域が狭かったこと。
- ・貧富の差が大きく犯罪が横行していたこと。
- ・膨大な資金を要する事業であるが、国家が独占的に得ていた石油収入があったこと。
- ・南米は戦前から、ヨーロッパの音楽家が休暇を利用して演奏旅行に来ており、ある程度クラシック音楽の土壌があったこと。

以上のことを逆に考えてみよう。

ほとんどの人が確実視していることだろうが、アブレウが亡くなったときに、エル・システムにとっての最大の危機となる。アブレウはかなりの

高齢であり、死が訪れるのはそれほど先のことでない。もちろん、エル・システムの運営者たちは、それを意識して後継者づくりを意識しているとしても、アブレウに代わる人材がいなければ、今後訪れる様々な社会・政治的な変化に適切に対応できるかどうかは不明である¹⁰⁵⁾。

政治的な危機は既に訪れている。エル・システムを様々な領域まで拡大したチャベスが亡くなり、マドゥロウ大統領に代わった以降、新自由主義的な勢力が攻勢を強め、各地でゲリラ戦を展開し、それを弾圧するマドゥロウへの批判も高まってきた。そして、そうした勢力は、ドゥダメル批判を展開し、アメリカでもドゥダメルを詰問するメディアの論調が出てきている。2014年の2月に、エル・システム40周年記念演奏会が開かれたとき、マドゥロウ大統領が招待されていたので、政治的反対派は、ドゥダメルに指揮を放棄せよと迫ってデモを組織した。そうした勢力は、エル・システムをチャベスの事業と規定しているが、歴史を見れば明らかなように、チャベスとは全く反対の政治家だったベレスの時期に発足し、発展したものであって、チャベスはそれを拡大したに過ぎない。反チャベスの政権が成立したときに、エル・システムをどのように扱うかは、未知数であるが、そのときアブレウがいるかどうかによって、進展は変わってくるだろう。しかし、ドゥダメルへの政治的批判が公然となされるようになってきていることは、エル・システムの将来にとってネガティブな状況が生まれていることを示している¹⁰⁶⁾。

エル・システムの膨大な費用は、青少年の対策(福祉や安全)として、国家がほとんどを賄ってきたことは既に指摘した。そして、その費用は、石油収入によって賄われた。ベネズエラは世界有数の産油国であり、欧米資本によって開発されたが、石油ショック時の高収益後、1976年に国有化しており、その後石油収入は国庫収入となった。それは納税されたのではないために、国民がエル・システムにかなり偏った投資をしても、大きな反対運動などはなかった。むしろ、犯罪から子どもを守る事業として、国民は大いに歓迎したのである。しかし、経済が発展して、国民の志向が多様化する、あるいは犯罪が減少して子どもを守る必

要性の意識が低下する、減少しなくても、犯罪から子どもを守りつつ、子どものやりたいことが可能になる他のことが広まる、等々の変化が、エル・システムに偏った国庫予算への不満が生じてくる可能性は小さくない。また、それは成熟した社会としては当然のことだろう。

更に石油収入に依存する態勢は、既にかんりの危機に直面している。それはここ数年来の原油価格の低下である。外貨収入を石油に依存しているベネズエラは、経済が逼迫している。この傾向が今後も続けば、エル・システムの予算は削減されざるをえなくなり、「無償」で「誰でも」という原則が維持できなくなる可能性がある。無償を止めて有償にする、あるいは「誰でも」を止めて選抜を導入する。あるいは、熱心なメンバーの目標である有給の上級メンバー、その給与を削減するなどの対応がとられる可能性があるが、その瞬間にエル・システムがこれまで得てきた「評価」は、大きな痛手を蒙るに違いない。

結論的には、ベネズエラ社会が、国民全体の経済的水準を向上させ、各家庭の可処分所得が上昇する中で、国庫の補助があるとしても、完全無償ではなく、家庭自身がある程度の負担をする中で、ひとつの選択肢としてエル・システムが発展するのが、理想的な形態ではないだろうかと考える。

注

- 1) 'La tiranía de El Sistema de Orquestas'
<http://www.lapatilla.com/site/2015/07/07/la-tirania-de-el-sistema-de-orquestas/>
- 2) Michael Kaufmann "Das Bunder von Caracas" 2011 s33 しかし、エル・システムの公式ホームページによれば、Frank Di Polo, Ulyses Ascanio, Sofía Mühlbauer, Carlos Villamizar, Jesús Alfonso, Edgar Aponte, Florentino Mendoza, Carlos Lovera, Lucero Cáceresの9名が記されている。
<http://fundamusical.org.ve/category/el-sistema/historia/#.VCTwr8scSck>
- 3) Andrea Creech "El Sistema and Sistema-Inspired Programmes: A Literature Review of

- research, evaluation, and critical debates”
2013 p18
- 4) Baker p66 JALはEscuela Superior de Música José Angel Lamasで教会施設であったが、1887年から音楽学校になっていた。1976年に廃止され、記念館になった。
- 5) 山田真一『エル・システム』 p94-95
- 6) 山田 p107
- 7) Baker p65
- 8) トリシア・タンストール『世界でいちばん貧しくて美しいオーケストラ』原賀真紀子訳 p83 Tricia Tunstall “Changing Lives-- Gustavo Dudamel, El Sistema, and the transformation Power if Music” 2002 p59
- 9) ただし山田は学業がある者や仕事をもった者もいたので、練習参加が困難な者もいたと書いている。山田 p112
- 10) ポロはJLJOのコンサートマスターやソリストを務め、この後ずっとエル・システム運動の中心を担うことになる。http://fundamusical.org/ve/actividades-artisticas/musicos/solistas/frank-di-polo/#.Vc_YL8bouck
現在もバイオリニストとして活動もしている。
<http://www.eluniversal.com/arte-y-entretenimiento/musica/150422/frank-di-polo-y-ruben-riera-celebraron-a-el-universal>
- 11) 急激にメンバーが増えたのは、もともと参加意思がありながら、様子を見ていた人たちが、実際に動き出したので、決意したということであり、資金的な手段で引き抜きをしたことがあっても、もっと後のことだと思われる。出発時点からそうした資金があったとは思われない。
- 12) 第一回の演奏会の情報は山田とタンストールでは異なっている。演奏曲目も同じではなく、またこの後メキシコ演奏旅行が提供されるが、そのきっかけとなったメキシコ大統領の来場が、山田は第一回のときのように書かれ（断定しているわけではない）、タンストールは、メキシコ大統領がこの直後に訪問したので、それに合わせて外務省での演奏会を開いたことになっている。山田は第一回の演奏会が外務省で開かれたとしている。山田p112、タンストールp83-84 またカウフマンは、Casa Amarillaで行ったとしており、曲目は山田と同じである。メキシコ大統領を第一回演奏会にアブレウが招待したと書いている。Kaufmann s48ここらは、かなり情報が曖昧であり、それぞれ現地で調査をして、関係者にインタビューしている場合でも、説明が異なっているのは、ベイカーの批判するエル・システムの秘密主義がある程度納得させられる。
- 13) 山田はここでも異なる説明をしており、アブレウが外務省の協力以外に、賛同者などから寄付を集めて、エルクレス航空機をチャーターして行ったとしている。山田p114 カウフマンは軍隊の飛行機説。Kaufmann s62
- 14) Baker p225-226
- 15) Kaufmann s67
- 16) 日本でいえば、法務省の非行対策や厚生労働省の福祉関係を扱う。
- 17) タンストール p93
- 18) 山田 p132-133
- 19) Baker p36
- 20) Baker p68
- 21) Baker p153 ベイカーのこの著書は、そうした劣悪な条件に置かれている地方の指導者のインタビューを多数掲載している。
- 22) Baker p176 しかし、ベイカーもアブレウが悪意をもって、地方を利用し、地方に回すべき資金を中央に横取りしていると考えているわけではない。アブレウはお金を集める天才だが、使い方が下手だと評価しており、おそらく地方まで配慮が行き届かないのだろう。地方の混乱については、小林武史が地方のオーケストラの指導を依頼されて赴いたときの状況を詳しく紹介している。あまりに現地の状況が酷いので、帰国を宣言して初めてアブレウが対応したという。山田 p135-153
- 23) しかし、このときの指揮者の扱いについてベイカーは批判を加えている。(後述) Baker p33
- 24) アブレウ自身も、TEDの授賞式の演説の中で、七つの約束をしている。

- 1 社会的権利としての楽しみと学習。新しい世代に対する社会的に高い優先権として、音楽芸術の民主化。
- 2 質的向上、リハビリテーション、社会的参加。特別支援教育のプログラムと、経済的な機会のほとんどない、放置された子どもたちの教育プログラム。職業のキャリアを発展させることのできない子どもたちに対して、労働の資格、例えば楽器の製造や修理の機会などをあたえる。
- 3 個人、家族、共同体への統合と着目。家族に重要と認められた子どもは、大きな新しい進歩をとげるのであり、家族が社会的経済的改善のために目覚める。
- 4 物質的貧困は、精神的富によって代わられる。オーケストラ活動に参加すると、新しい目標、プロジェクトや夢の実現を容易にする。
- 5 音楽を町の日常生活のなかにとり入れる。エル・システムは倫理的原則に導かれて形を維持する。
- 6 間違っただ音楽の考え方の克服。エル・システムは西欧音楽に限定されない。
- 7 能力主義への道と国家の進歩。それはベネズエラの誇りの象徴である。
Lolagars 'La orquesta los sacó del barrio'
2013.1.31
<http://gigantesde laeducacion.com/la-orquesta-los-saco-del-barrio/>
- 25) <http://fundamusical.org.ve/educacion/metodologia-2/#.Uz3DQcuKCck>
- 26) Nicolas Billaux "New directions for classical music in Venezuela" 2011.9.25 p19
- 27) ベイカーは、このあまりに多い練習がエル・システム参加者に多様な経験をすることを奪っていると批判している。Baker p135
- 28) <http://fundamusical.org.ve/contacto/preguntas-frecuentes-faqs/#.U6mH-8uKCck>
- 29) ベイカーは、確かに楽器は貸与されるが、それは質の低い楽器で、経済的に豊かな子どもは、より良い楽器を購入できるので、結局は貧しい者は不利な状況に置かれていると指摘している。Baker p180 この指摘は間違いではないだろうが、解決不可能な批判であろう。また、子どもたちの練習量から考えると、弦楽器はかなり引き込まれるので、鳴る楽器になっていくともいえる。中央の選抜メンバーになれば、良い楽器が貸与されるので、問題はないように思われる。むしろ、楽器工房を設立して、参加者全員が楽器を無償で貸与する態勢を作っていることが驚異的である。
- 30) <http://fundamusical.org.ve/contacto/preguntas-frecuentes-faqs/#.U6mH-8uKCck>
- 31) Nicolas p17
- 32) これは、日本ではプロ野球を目指す野球少年が、小さいころからリトルリーグに参加し、野球部に属して甲子園を目指し、ドラフトで指名されることを期待するシステムに似ている。
- 33) Baker p176
- 34) Baker p141
- 35) 'Strings from the slum' in "The Strad" 2004.2
- 36) <http://fundamusical.org.ve/contacto/preguntas-frecuentes-faqs/#.U6mH-8uKCck>
- 37) Baker p186
- 38) 'Strings from the slum' in "The Strad" 2004.2 p36
- 39) Kaufmann s87
- 40) この雇用関係を日本の野球界と比較すると、かなりの相違があることがわかる。日本の野球界は、リトルリーグやプロ野球、社会人野球は民間の団体である。部活は通常学校単位で行われており、正規の野球指導者として生活している者は、監督コーチの中で極めて少ないと思われる。多くの部活の監督コーチは、学校の教師で通常の授業を行っている。日本のプロ野球の選手は1000名弱であり、選手寿命は短く、引退後の生活が安定している者は多くはない。エル・システム関連のオーケストラで生活している者は、日本のプロ野球選手よりは多少少ないが、人口を考えれば、むしろ多いとも考えられるが、スポーツではないので現役期間は長い、「ユースオーケストラ」としての性格の強いエル・システムでは、まだ大人になってからの活動スタイルが確立しておらず、当初からのメンバーは、大人のプロオーケストラとしてやっているが、

次々に作られる若手のオーケストラの人たちの今後については、様々な問題が現れると考えるべきであろう。

- 41) 'Tocando en el cielo: el sistema de orquestas juveniles e infantiles de venezuela'

<http://www.compromisoempresarial.com/entradas/2008/09/tocando-en-el-cielo-el-sistema-de-orquestas-juveniles-e-infantiles-de-venezuela/>

- 42) Baker p130

- 43) 「エル・システムは古い音楽ばかりやっており、現代音楽を全く無視している。」 Greg Sandow 'El Sistema — troubling' 20103.19

http://www.artsjournal.com/sandow/2010/03/el_sistema_-_troubling.html

しかし、設立時のJLJOが、設立間もない時期に、メキシコの作曲家カルロス・チャベスの作曲した音楽を演奏したことでわかるように、決して、古い時代の音楽だけを演奏してきたわけではない。ただセリエ音楽や1・2音などの「現代音楽」を演奏することがほとんどないことは事実のようだ。しかし、基本的には青少年オーケストラであることを考えれば、「現代音楽」作曲家的な立場からの批判は妥当とは思われない。

- 44) 'O Laboratório de Etnomusicologia da Escola de Música da UFRJ apresenta' in "Latin American Music Review University of Texas Press"

- 45) Nicolas p19

- 46) <http://fundamusical.org.ve/educacion/centro-academico-de-luteria/#.Vc2HJ8bouck>

- 47) クラシック音楽の世界では、ほとんどが最初はプライベートレッスンを受けるのであるが、その個人的レッスンが如何に困難であるかは、逆にトップレベルのバイオリニストの経歴を見るとよくわかる。思いつくままに調べたが、ハイフェッツ、クレメル、クライスラー、五島みどり、アイザック・スターン、ズッカーマン、フランク・ペーター・チンマーマン等は、父か母、あるいは両方がバイオリニストである。もちろん、両親とも音楽家ではない者もいるが、

それは少数である。バイオリンはごく小さいころから始めないと、トップレベルにはなれないこと、バイオリンの姿勢は極めて、身体的に不自然で、小さな子どもには耐えがたいものであり、また、直ぐに崩れてしまうので、正しく矯正できる人が毎日見る必要があること、などから、バイオリンは親が習熟していることが非常に有利なのである。バイオリンを始めても挫折する者が多いのはこの理由による。エル・システムは毎日教室で練習し、専門の指導者がみているし、集団で練習するので、この困難を容易に克服できるのだと解釈できる。

- 48) Nicolas p22

- 49) ハワード・グッドール『音楽史を変えた五つの発明』松村哲哉訳 2011

- 50) ユース・オーケストラといっても、アバドが組織したヨーロッパ室内管弦楽団、マーラー・ユース・オーケストラ、モーツァルト管弦楽団などは、世界中からオーディションで選拔し、事実上のプロであり、当然レベルは極めて高いが、国内でアマチュアとして活動しているユース・オーケストラとエル・システムと比較すると、音大生や卒業生を中心とするオーケストラでも、レベル差がはっきりしている。

- 51) 山田p126-155

- 52) Nicola p37 Erick Neher 'dudamel, Domingo, Villazon and the New Classical Music' "Hudson Review"

- 53) Baker p143

- 54) エル・システムのホームページでは、「子どもたちは、合唱、理論、オーケストラ、ハーモニー、音楽言語などの授業をとります。」と説明しており、理論学習が入っていることを明示している。もちろん、実施状況は様々だろう。
<http://fundamusical.org.ve/contacto/preguntas-frecuentes-faqs/#.U6mH-8uKCck>

- 55) Daniel J. Wakin 'A Youth Movement at the Berlin Philharmonic' The New York Times 2006.5.8 <http://www.nytimes.com/2006/05/08/arts/music/08youth.html?pagewanted=1&ei=5088&en=09a6f4103794525e&ex=1304740800&partner=rssnyt&emc=rss&r=0>

- 56) 'Democracy and Orchestra' <http://www.rehau.com/group-en/corporate-information/press/unlimited/unlimited-7-south-america/democracy-in-the-orchestra/democracy-in-the-orchestra/1321154>
- 57) ただし、一度オーディションに落ちているので、アブレウが行った便宜は、例外的だがオーディションを受けさせてくれたということだろう。
- 58) この点については、ベイカーは真っ向から対立している。ベイカーによれば、エル・システムのオーケストラ活動は、ほとんど指揮者の独裁で、口をはさむことはできず、絶対服従であると、ルイスとは逆のことを書いている。300ものオーケストラがあるのだから、どちらの事実も間違いではないだろう。ルイスの所属していた最上級のオーケストラと、ベイカーが最も多く観察した地方の初級のオーケストラとは雰囲気異なっていたのであろう。Baker p114
- 59) 筆者自身の経験だが、ドゥダメルとウィーン・フィルの公開リハーサルをサントリー・ホールで聴くことができた。
- 60) 山田は第二のエル・システム関連の著書で『貧困社会から生まれた「奇跡の指揮者」グスターボ・ドゥダメルとベネズエラの挑戦』（ヤマハミュージックメディア）と題している。そこで、「彼らが皆、貧しい家庭の出身者で、犯罪歴を持つメンバーが多くいるという認識」が誤りであることを指摘しているが、(p8) 山田の著書の題そのものが誤解を生んでいる。エル・システムのメンバーは貧困層が80%という「売りだし方」はエル・システムの広報活動にもあり、実際とイメージの乖離が意図的に生み出されていることは、ベイカーが批判している。
- 61) ベネズエラの代表的な都市で、音楽が盛んな地域である。アブレウの出身地でもある。
- 62) タンストール p40-41
- 63) 山田『エル・システム』 p212 エル・システムがドゥダメルにとって「学びの場」であることは、世界の代表的指揮者になった今でも変わらず、ドゥダメルがオペラを指揮する際に、カラカスで同じ曲を事前に振ることがあるという。これは、オペラ指揮者がよく実行することで、有名な劇場で、慣れない曲を指揮する前に、トップクラスではない馴染みの劇場で指揮をして「練習する」ことがよくある。カラカスの側でもドゥダメルが指揮するメリットがあり、ドゥダメルも練習できるという関係が築かれている。
- 64) エル・システムからは、国際的に活躍する音楽家が多数育っていくと思われるが、その中でも、指揮者が多く輩出すると考えられる。それは、指揮はエル・システムの多数のオーケストラで多数の若手が学び、かつ実際に指揮しているが、こうした環境は先進国の音楽大学では決して与えられないものである。
- 65) 山田によると、1980年にカラカス市が、カラカス交響楽団を創設したときに、JLJOはシモン・ボリバル交響楽団と名称変更し、同時に、小中学生中心の児童オーケストラと、中高生中心の青少年オーケストラを分離設立した。そして、青少年オーケストラが、ベイカーのいう Children's Orchestra に対応すると考えられる。
- 66) Baker p33 この記事自体を探すことができなかったため、詳細は分からないが、記事が指揮者交代の数日後であるために、自ら辞任したと考えられる。メディナは創立間もない頃からの指導的メンバーであり、エル・システムの発展期として彼が新たに就くポストはたくさんあったから、エル・システムからアブレウが追放したとは考えられない。ベイカーはメディナの発言を多数採用しているが、アブレウのインタビューは実現していないので、断言はできないが、この点についてはベイカーの批判は妥当ではないといえる。
- 67) 1991年にシモン・ボリバル交響楽団が初めての日本公演を行うが、それを記事にしたのは短い朝日新聞だけであり、一般新聞はほとんど報道していない。「皇太子殿下は23日夜、東京・渋谷のオーチャードホールで開かれたベネズエラ国立シモン・ボリーバル交響楽団の演奏を鑑賞された。」(朝日1999.4.24) という、むしろ皇太子の記事となっている。
- 68) 朝日新聞は5本の記事、読売は2本の記事を掲

- 載し、しかも音楽的な側面だけではなく、エル・システムの紹介も比較的詳しく行っている。
- 69) アバドの創立した青少年オーケストラは、ヨーロッパ室内管弦楽団、マーラー・ユース・オーケストラ、ヨーロッパ共同体ユース・オーケストラ、モーツァルト・オーケストラなどがある。録音なども活発に行っていた。‘Claudio Abbado’ in “The Economist” 2014.2.1 <http://www.economist.com/news/obituary/21595387-claudio-abbado-conductor-died-january-20th-aged-80-claudio-abbado>
- 70) アバドの死を追悼する記事で、エコノミスト誌は、アバドを共産主義者だったと書いている。
- 71) “A Conductor at Work Claudio Abbado” この映像には、ヨーロッパ共同体ユース・オーケストラとの合宿風景なども紹介されている。
- 72) 感動は「音楽」的側面だけではなく、国家がお金を出している点だった。‘A Life in music: Claudio Abbado’ Tom Sevice 2009.8.8
- 73) Tom Service *ibid*
- 74) Luis Dias ‘Claudio Abbado: El Sistema loses a champion’ 2014.1.21 <https://luisdias.wordpress.com/2014/01/21/claudio-abbado-1933-2014-el-sistema-loses-a-champion/>
- 75) この演奏会は、「白い手の合唱団」のものに合わせて、“El Sistema at Salzburg Festival” として映像が市販されている。
- 76) Kaufmann s144
- 77) “Rhythm is it!”
- 78) Baker p10
- 79) Baker p114, 176
- 80) Baker p263
- 81) 日本の学校教育で吹奏楽は極めて盛んであるのにオーケストラはほとんど学校での部活がないのは、1 吹奏楽がスポーツ活動の補完と考えられている、2 楽器が安い、3 小さいころから訓練しなくても比較的容易に上達する、等が考えられるが、楽器の費用の問題は大きいと思われる。
- 82) <http://fundamusical.org.ve/educacion/centro-academico-de-luteria/#.Vc2HJ8bouck>
- 83) ‘En Caricuao se enseña a los jóvenes a hacer violines, arpas, violas y chelos’ http://www.eluniversal.com/2010/03/07/ccs_art_el-sistema-nacional_1785021
- 84) ‘La Colonia Tovar tendrá Centro Académico de Luthería’ 2010.11.27 <http://analitica.com/entretenimiento/la-colonia-tovar-tendra-centro-academico-de-lutheria/>
- 85) エル・システムを取り入れている南米の国では楽器製造も取り入れている。‘Orquesta Escuela: Primeros pasos para crear el Centro Argentino de Luthería de Vientos en Chascomús’ 2014.6.12 <http://www.elcronistadiario.com/2014/06/orquesta-escuela-primeros-pasos-para-crear-el-centro-argentino-de-lutheria-de-vientos-en-chascomus/>
- 86) Baker p270 学校でのドロップ・アウトが減少していることも認めている。しかし、ベイカーは、それはオーケストラだからではないとも断っているが。
- 87) Baker p96 アコスタは、犯罪少年から施設でのヌクレオで更生し、その後エル・システムの指導者として活躍している「貧困・犯罪からの脱出」の典型的な人物として頻繁に登場する。
- 88) Baker p180
- 89) Baker p272
- 90) Baker p172
- 91) ベイカーによると、こうした実情に対して、エル・システム運営は秘密主義で、実態を明らかにしていないという。あるヌクレオのメンバーの話として、同時に入った8名のうち、残っているのは2名だけだという例を紹介している。p268
- 92) Baker p186
- 93) Baker p178
- 94) 人間科学部に最初に入学した障害者は、聴覚障害だった。ほぼ完全に聞こえない状況であったが、音楽を楽しむことはあるのか、私が質問したことがある。そのとき彼女は、「例えば、ピアノを誰かが弾いているときに、ピアノに触れていると振動で音楽を感じることができる、

- と言っていた。」どのように音楽を感じるのかは、わからなかったが、少なくとも、演奏中に触れることができる、つまり、触れても演奏に支障がない楽器であれば、その振動で何かを感じているのだろう。しかし、大部分の楽器は、演奏中に触れることはできないから、ほとんどの音楽は楽しめないことになる。それほど、聴覚障害者にとって、音楽は立ち入ることが難しい領域である。
- 95) おそらく2007年から2~3年の間。著書には明記されていない。
- 96) タンストール p188-189
- 97) 日本の誇るバイオリニストの和波も、点字化された楽譜で音楽を暗譜して演奏する。和波は、サイトウ記念オーケストラに参加しているが、ピアニストの辻井がオーケストラと共演するとき同様、全盲の音楽家が合奏に加わることは、特に支障はない。
- 98) 'La orquesta los sacó del barrio' "America, Venezuela 5" 2016.1.31
- 99) 'El Coro de Manos Blancas demostró que el alma no tiene discapacidad' 指導者のガルシアは、質問に題名のように「白い手の合唱団は、障害など存在しないことを示した」と演奏会のあと答えている。
<http://fundamusical.org.ve/prensa/noticias/el-corro-de-manos-blancas-demostró-que-el-alma-no-tiene-discapacidad-2/#.VeRd1Mbouck>
 エリック・ブースは、ザルツブルク音楽祭での「白い手の合唱団」出演時の模様を次のように紹介している。「ホワイトハンドコーラスの聴衆は、最初は半信半疑だった。(チケットはフルプライスだった) 少し前に演奏したウィーン少年合唱団のように、洗練された声ではなかったし、白い手は、あまりそろっていなかった。しかし、次第にその感情表現の豊かさに感動し、最後は深く興奮していた。」 Eric Booth 'FIVE ENCOUNTERS WITH EL SISTEMA INTERNATIONAL'
<http://ericbooth.net/five-encounters-with-el-sistema-international/>
- 100) タンストール p194
- 101) Carlos Flores によるインタビュー。'La tiranía de El Sistema de Orquestas' 2015.7.7
<http://www.lapatilla.com/site/2015/07/07/la-tiranía-de-el-sistema-de-orquestas/>
- 102) Baker p173
- 103) 'democracy in the orchestra'
- 104) 例え、Eric Booth 'El Sistema's Open Secrets' Teaching Artist Journal 9 2011 Melissa Lesniak 'El sistema and american music education' in "Music Educators Journal" 2012.12'
- 105) Govias はエル・システマが成功した理由で、あまりいわれない重要なことを、1 使命への情熱、2 結果への質、3 優れた管理と指導性、4 倫理的で責任感のある財政的運営、5 革新と学習への関与、6 政治的中立性をあげているが、これらはすべてアブレウによって示された質である。Jonathan Andrew Govias 'The Five Fundamentals of El Sistema' https://drive.google.com/file/d/1fkZq0XShy1QrdhW95V0bSBL6eot1BDA7c1QjDaUAx9P_i-eGRdFE7oSQEWR3/view?pli=1
- 106) Damian Thompson 'Classical music's greatest political butt-kissers: Dudamel, Gergiev and Rattle' 2015.2.14
<http://www.spectator.co.uk/arts/music/9437552/was-simon-rattle-too-new-labour-for-the-berlin-philharmonic/>